

夫婦関係、交差する二つの生活世界

——方法論的反省と越境の試みとして——

野 村 哲 也

| | | |
|-----|--|----------------------|
| I | はじめに——方法論的レフレクション—— | 3 |
| II | エスノメソドロジック的アプローチによる 新たな解釈の可能性 | 7 |
| III | 現代日本の夫婦関係 ——ゆらぎの中の実像を求めて—— (1) 夫婦関係研究の意味 (2) 理論仮説と作業仮説 (3) 統計解析的分析と意味構成的解釈 ——二つの方法論を交差させて—— | 12 12 15 20 |
| IV | 契約型個人主義家族の萌芽とその分析視点 ——交差する二つの生活世界—— | 49 |
| V | おわりに——新しい課題のために—— | 57 |

I はじめに——方法論的レフレクション——

筆者はこの二十数年、故姫岡勤教授を中心とする研究者グループの一員として家族の種々相についての社会学的研究を行って来た。何れも文部省科学研究費によるもので、その中の幾つかは、『現代のしつけと親子関係』（1974、川島書店）、『三世代家族—世代間関係の実証的研究』（1976、垣内出版）など（何れも分担執筆）の形で公刊されている。

その研究方法の特徴を一言で言えば、T. パーソنزの構造—機能主義理論を基盤とする集団論的パラダイムの範疇に属するものであった。例えば「しつけ」の研究において、それはほぼ社会化と同義的意味のものであり、社会（全体構造）の均衡と存続にとって必要な価値の内面化が中核となる。E. フロム的に言えば「社会の要求どおりに行動したいと欲し、またそのことで満足を与える社会的性格」を形成することであった。それは社会を構成する基礎集団である家族の第一義的機能（全体に対する貢献）であり、父（夫）、母（妻）の性別役割もそれと強くリンクされているというのが暗黙の前提とされていたのであ^①る。

また「三世代家族」の研究では、都市化、産業化の進展と共に、半ば、必然的な現象と考えられる核家族化の趨勢の中で、二つの核家族への分裂の危機を常に内包しつつ、なお一つのまとまりをもった集団として統合、適応している三世代家族の勢力・役割の構造や情緒関係、ならびにそのライフサイクル的変化（世代間の勢力関係の変化等）を実証的に研究するものであり、まさに集団論的パラダイムが色濃く反映されたものであった。また、そこで言う実証的とは、作業仮説の検証に必要なデータを質問紙法を主体として大量収集（いわゆる社会調査）し、その統計解析によって相関関係や因子寄与率を見出そうとするものであり、標本抽出や尺度作成の技法はデータの信頼度や妥当性を高める

ものとして、より精緻化されて行った。そしてこれらは何れも当時の社会学において、T. S. クーンの言う通常科学化した方法論でもあった。

この傾向はアメリカにおいてもほぼ同様である。構造－機能主義に対する新しいパラダイムとして、現象学的社会学の実践的方法論を旨としたエスノメソドロジストの間でも、「今日の社会学では予測作業は実証的・計量的偏向を帯びている。予測や因果分析は変数間の相関係数や回帰係数をはじき出すことを意味するようになってしまった。計測そのものは変数に数値を与えることと同義になり、「分析」とは変数に統計的操作を行うこととなった。このような予測作業や因果分析が今日の社会学の主流を占めている^②」と認めており、しかしそれだけではない、「予測や因果分析のもう一つの方法は民族誌的（ethnographic）な記述である」という形で彼らの主張を展開するのである。

なお本稿はこのエスノメソドロジー的視点をとり入れて統計的調査データの再解釈を行うことを主要な柱の一つとするものであるが、同時にそれが統計調査の方法の有効性を減ずるものでないと考えている。それどころか筆者の言う漸近的接近法（「科学主義批判再考－説差・近似論」1992、哲学論集39号）からすれば、理論的モデルの精緻化において辿らなければならない第一次、第二次の近似モデルを提示する極めて有効な方法なのである。

その後、「異居親子関係の研究」（1976～77）、「家族行動の研究」（1981～82）等においてもほぼ同様に構造－機能主義の理論枠組と集団論的パラダイムのもとに、落合恵美子らの言う歴史概念としての近代家族を暗黙知的前提として研究が進められ、かつそれらは分析用具として十分な有効性をもっていた。

しかし、筆者が研究代表者として行った「夫婦関係の変化に関する実証的研究」（1985、86年度文部省科学研究費総合研究）においては、伝統的とも言えるこれまでの方法のみではカバー仕切れぬ問題点が浮かび上がったのである。

その1つは強固な制度的枠組によって拘束された前近代的夫婦関係において

すら、「蓼喰う虫も好きずき」と俗称され、「夫婦喧嘩は犬も食わぬ」と言われるほど、外からは窺い知ることの困難な「夫婦という人間関係」の機微を探るには、さらにインテンシブな方法、たとえばエスメソドロジーにおける会話分析に似た方法が必要なのではないかという研究対象ならびに内容の特殊性から来る疑問である。もちろん、従来からもこうしたミクロな問題に対しては事例研究法や実験的方法があるが、その延長線上のものとしてではなく、夫婦を一つの意味構成体と考えるという意味学派的な新たな視点を含んだアプローチが必要であろうということである。

第二は、家族そのものが大きなゆらぎの中にあるとされる現代社会において、時間軸のある点で社会を切り取った形で分析することが有効かという状況適合性の問題である。もちろん、あらゆる分析や解釈には本質的にある側面ないしは断面を切り取るという作業（とくに時間軸にたいして）は避けられないが、構造・機能分析はとくにその性格が強い。（むしろそこに長所と欠陥があるといってもよい）この欠陥を補うものとして従来からも時系列分析、追跡調査、コーホート分析などがあるが、家族の意味そのものが変化しようとしているとき、同一家族概念で時系列分析を行っても無意味である。それぞれの時代の人々の意味構成物としての“家族”とそれをとりまく社会状況のエスノグラフィックな詳細としての社会的文脈にその“家族”を着床させてはじめて比較が可能であろう。ここにもまた新たなエスノメソドロジー的視角を必要とする可能性があらう。

第三は、データ解釈の上でのエスノメソドロジー的接近ということとどまらず、夫婦関係を全く別な視点、たとえば現象学的社会学における生活世界論に示唆を受け、夫、妻のそれぞれの生活世界の交差しあう現象としての夫婦関係として捉えなおしてみるということである。それは従来の家族・夫婦モデルそのものの転換を迫るものであり、恐らく従来とは全く異なった家族現象の解釈を生

み出すであろう。

家族を社会における最も基本的な構成単位と位置付け、人々は、それを生活（世界）における重要なより所として、家族成員が身を寄せ合う形で幸福を追求し、不時の禍害を最小限にいとめようと努めて来た集団（これは森岡清美による家族の定義でもある）、そしてその生活共同の中から醸し出されるえも言えぬ感情融合的絆（戸田貞三）、それが家族の像であった。しかし、そこにイメージされる主婦像や子供観が西欧においてもたかだか18、9世紀以後の、いわば近代家族という歴史的なものであることが、性、婚姻・家族についての社会史によって次第に明らかにされつつある今、ゆらぎつつある現代家族（夫婦）の分析には、自明視されて来た近代家族像の問い直しと新たな視点による再構成を必要とするであろう。

すでにアメリカでは、一人の稼ぎ手（夫）と、専業主婦、子という核家族の形態は、全アメリカ成人人口の13%に過ぎず、離婚から再婚への過渡的なものをふくめた片親世帯16%、単身生活者（未婚・死別・離婚）21%（1977年労働統計局）なのである。そして離婚・再婚の連鎖はステップ・ファミリー（ブレンデッド・ファミリーとも言う）なる語を学術誌にも登場させ、シングلز、DINKSなどの風俗用語化、子育てがステイタスシンボル化しつつある等のマス・コミ論調等々（マスコミが騒ぎ立てる程過大視することは誤りであろうが、必ずしも過小視することはできない）、子の存在そのものの意味にさえ変化が現れている。

これらの傾向は大きくは家族中心主義（familism）から個人主義への変化ととらえられ、後に示すごとく、統計調査の方法によっても分析できるが、変化の奥にある深層構造をさぐるにはパラダイム転換的な新しい視点が必要であろう。

筆者は、統計調査的データのより深い解釈および意味付与については、“エスノグラフィックな文脈への着床”ということを重視しており、自明視された近

代家族そのものの捉え直しという点については、常識的態度のエポケーに始まるA. シュッツの生活世界論を手掛かりとしたいと考えている。それにはまず、多少とも変形した形で援用しようとするエスノメソドロジーや生活世界論について、諸概念の拡大や変形（場合によっては換骨奪胎となるかも知れぬが）を行っておこう。その際、それぞれの理論への理解不足な誤解があったとしても、創造的誤解として大胆に越境してみたい。

II エスノメソドロジー的アプローチによる新たな解釈の可能性

ここにエスノメソドロジー的再解釈というのはガーフィンケルらの方法そのものの踏襲ないしは適用という意味ではない。彼等が関心を持ちかつ成果をあげたのは、例えば陪審員、仮保釈中の麻薬患者、社会福祉援助の申請者、両性具有者など限定された状況でのミクロな相互作用（会話分析など）においてであり、その相互作用状況を解釈して行く過程そのものが問題とされている。彼等はそうした事例での意味構成過程から“普通の人々”の日常生活における行動の理解の仕方を一般化しようとするものであり、その妥当性についての批判と共に、あまりにも限定的で瑣末なことに目を向け過ぎていると非難される。筆者もまた依拠すべき方法論として全面的に受け入れることには躊躇するものである。しかしながら人々の意味付与（解釈過程）における社会的文脈の重視、そしてそのためのエスノグラフィックな詳細の不可欠性の指摘は、次元を変えることによって、調査データの意味付与的解釈の可能性に大きな示唆を与えてくれるであろう。

たしかにエスノメソドロジーそのものはA. シュッツの現象学的社会学の流れをくむものであり、現にある社会を所与のもの（客観）とし、その構成や機能関連を探ろうとする構造―機能分析を批判することから始まった。「社会的世

界は人々の意味構成物」であり（A. シュッツ1932）、しかもその意味は、人々の相互作用によって不断に生成される機会的構成物であり、発話者の意図だけでなく聞き手の解釈過程によっても付与されるものである。その意味では規範がその外在性・拘束性（E. デュルケーム）によって人々の行為を規定するという決定論の見方にも反対する。K. ライターによれば「規範理論は規範（ルール：表層構造）についてのべるが、個々の場でその規範の意味や適用を判断するために人々の行う解釈作業（深層構造）については何も語らない^②」のである。規範はそれを規範と意味づけて行為する（発話を含む）ことによって発現するものであり、誰も規範の指示する行為を遵守しないとき、規範としての意味をもたないのである。エスノメソドロジーとはまさにこのプロセス、すなわち人々、（ethno）が解釈を通して社会的構造感（後述）を生み出すその仕方（method）を検討する（logie）ものであるが、その仕方について「意味は一連の内面化されたルール（規範や文法）の産物ではなく〈機会的な表現〉（E. フッサール）についての解釈のためのエスノグラフィックな文脈を組み立てることによって構築される」と考える。エスノメソドロジスト（とくにA. シクレル）はそれをN. チョムスキーの言語の生成モデルに示唆を得て、社会的な“生成的意味論”^④として展開する。彼によれば我々の日常言語は文脈状況表示的（indexicality）であり、文脈を与えられなければ意味内容が定まらないという不確定性・多様性をもったものである。（O. ノイラート、R. カルナップらの科学言語はそのあいまい性を排し文脈から独立した意味をもつものとして提唱されたものであった）

それはちょうど幼児の統語法獲得において、最初は幼児の発する電報文のように切れ切れの文は聞き手である母親によってその状況的文脈の中から適切性を与えられ（解釈手続）、意味する行為を引き出すが、そのことが同時に幼児に言語運用の能力（適切性を判断する能力）を発達させて行くのと同じである。

あるいはまた辞書における複数の意味の中から一つの解釈を選択するための暗黙知文脈の役割にも似ている。

「規範や文の意味は、あらゆる機会について明白に客観的に規定されている訳ではなく、むしろそれは機会ごとに異なり、人々は規範や文の意味を不断に構築していかなければならない。ちょうど(言語学において)〈深層構造〉が〈表層の文〉を生成する能力をなしているように、〈解釈手続〉は文や規範に意味を付与し、適切性を判断する基本的能力をなしている」そしてこの〈解釈手続〉なるものの一部をなすものとしてエスノグラフィックな詳細の付与をあげる。

「事物や出来事（現象）の固有の意味を理解するには、その表現が用いられた機会の詳細が付与されねばならない」と主張するのである。このような立場に立てば規範・階層・制度などの社会的圧力の諸変数はもはや説明変数とはみなされない。それらは社会的世界を客体的に眺めたり知覚したりするため、すなわち人々が社会的行為に意味や類型性を付与するために用いる解釈のための用具という意味を与えられる。

このような不断の解釈過程を通しての機会的に構成される意味（それぞれの場において固有の、そしてリアリティをもった意味）は、類似のあるいは異なった機会における繰り返しによって一つの達成物としての社会的構造感を再帰的に生み出す。バーガー&ルックマンにおける沈澱化(sedimentation)に似たプロセスと言えるが、それは完結的構成物でなく不断に再形成される進行形のものであり、その意味でまさに「社会的構成が客観的にリアルであるという感覚」なのである。

この社会的構造感(sense of social structure)は訳者である高山がいみじくも注釈しているように「あたまで固い父親」というときのあたまでに似たものと言えよう。シュッツ的な表現で言えば場の成員が認知し、確信し、当然視しているものとしての「この社会的世界が自然な秩序であるという日常的リアリテ

ィ感」であり思い込み（idealization）である。

ところでエスノメソドロジスト達は、人々の意味付けと意味理解（解釈）の仕方や、不断に意味構成される社会的構造感が達成的に維持されて行くメカニズムや過程を明らかにすることに関心をいただいているわけで、自ら「社会的構造感の内容を問題にしているのではない」とまで言っている。しかし筆者はむしろその社会的構造感の内容、たとえば現代の人々が抱えている夫婦イメージがどの様なものかという内容、ならびにそれが、（この点が最も異なる点であるが）彼らが主たる実践の場とした会話分析というミクロな場だけでなく、より広いコミュニケーションのチャンネルとしてのマス・コミを含めて（その一方向性という点での問題はあるが）どの様に形成されていくのかということにまで広げたい。テレビで繰り返し映されるホームドラマはそのフィクション性を薄めて、仮構のリアリティを獲得し、あたかもそれが、当たり前前の自然な秩序であるという日常的リアリティ感を構成していくのである。

さらにまた、彼らの言う“エスノグラフィックな詳細”についても単に「発話された機会（状況）についての詳細が付与されねばならない」というミクロな次元にとどまらず、社会状況についての詳細を付与することによって意味をより明確にするというように拡大したい。たとえば、家族における性別役割論も、かまどに釜をかけ薪や藁で炊く際に要する熟練や、洗濯板で洗う重労働にくらべ、全自動洗濯機と炊飯器の家事では全く意味もウエイトも異なるのである。“たまには夫も家事を”という発想は全く現代のものであって、昔の人にはあり得ぬ社会的構造感である。しかもそれはそう遠い昔ではなく戦前の農村のほぼすべてがそうであった。（さらに社会的エスノグラフィックな詳細を加えるならば、昭和5年の第一次産業就業者は49.7%で、恐らく国民の過半数がその様な生活であったといえよう）統計データの時系列比較には、形を変えた“エスノグラフィックな詳細”の視点が必要なのである。（なお同じ視点からみると

きフェミズムで問題とされる家事の“シャドーワーク論”にも大きな問題点があるが、それについては後でふれることにする。「出来事はその床着される文脈から意味を得て来る」のであって、「言葉に情況背景を付与する」（K. ライター）のと同じ意味で、データに情況背景を付与すること、および、その解釈に当たって「集合体の制度化された相貌を解釈枠組として用いる」ことにより、調査データは新たな光を当てられることになる。

第三は、質問紙そのものを一つの対話（但し一方的で一回限りの疑似的対話であるが）とみて、会話分析におけると同じく、受け手のエト・セトラ原則による補充（質問者＝発話者が言葉として発しなかったことを受け手が、エト・セトラの可能性の中から、場の適切性によって意味補充的に理解する）（K. ライター）がなされるものであるということの認識のうえに立った解釈を行うことである。さらに一歩進めれば、質問内容のみならず、その様な質問がなされたということ（たとえば夫婦別氏についての賛否）自体についての回答者の意味付与ということも問題となってくるであろう。この種の問題は従来からも回答のバイアスという形で論ぜられてきたが、そうした単純な形で片付けるのではなく、人（質問者）が人の行為（回答）を解釈するということは、逆に質問を發した自分が他者によって解釈されるのだという視点に立つことなのである。それはたとえば、無答という回答が多い質問は、その質問自体をも含めて解釈の対象になるということである。

しかしながら統計的調査自体は（筆者の言う一次ないし二次近似的な経験的一般化モデルを構築するに留まるという限界はあるにせよ）多くの普通の人々（無作為抽出）が抱いている社会的構造感に直接的に働き掛けようとするものであるという点に特色があるのであって（選択肢の設定等における操作性等の問題はあがあるが）特殊な状況における特殊な人の社会的構造感を一般化することの妥当性は別の次元にある。（したがってエスノメソドロジストは、いみじくも

社会的構造感の内容を問題としているのではなく、それが形成されて行くメカニズムや過程に関心があるという。)たとえ統計データの見いだすものが、しばしば人々のタテマエ的^⑥の当たり前感であったとしても、人々はそのタテマエ的^⑥の当たり前感を枠組として発言(行為)するのであり、それを知ることは人々の行為の結果を解釈する解釈枠組となり得るであろう。もちろん、それと同時に、人々の社会的構造感の深層構造の脈脈をさぐりあてるような質問、たとえばニヤッと笑ってそのとおりでと思うような的を得た質問、よくぞ聞いてくれた(今まで気付かなかった事のさらなる気づきを起こさせてくれた)というような質問の彫琢も必要であるが、それにも自然的態度のエポケーにはじまる現象学的社会学は新たな視点を展開してくれるであろう。(具体例については次章で述べることにする。)

III 現代日本の夫婦関係

——ゆらぎの中の実像を求めて——

(1) 夫婦関係研究の意味^⑥

我々が「夫婦関係の変化に関する実証的研究」(1985～86年度文部省科研費総合研究A 研究代表者 野村哲也)をテーマにとりあげたのは

① 従来の我国の家族研究においては、明治の旧民法が象徴的に示すように(それは中央集権機構の強化と軍国主義的政策の思想的基盤としての家族国家観を一般庶民にまで深く滲透させるため、それまで武士階級に支配的であった家父長制的「イエ」の制度と儒教倫理を色濃く反映するものであった)直系家族的なタテの関係を軸とする家制度と、その中での制度化された役割行動、勢力関係に関心が集められ、ヨコの関係としての夫婦関係、とくにプライベートな領域としての情緒関係の研究は未熟であったこと。

② それのみでなく、戦後の憲法ならびに民法の改正によって、両性の合意のみによる婚姻（憲法24条の1）、個人の尊厳と両性の本質的平等に立脚した家族のあり方（同24条の2）など理念レベルはもとより、民法ならびにそれを受けた手続法（制度レベル）である戸籍法においても「戸籍の筆頭に記した者およびその配偶者以外の者がこれと同一の氏を称する子又は養子を有するに至ったときは、その者について新戸籍を編成する」（同法17条）など、手続きや形式においても直系家族的色彩を徹底して排除しようとするものであった。

にもかかわらず、現実の生活（民俗レベル）での家族、とくに夫婦の関係は戦後かなりの年月を経てもまだ「家」の残像を根強く残存させていた。そのことは新聞の「人生案内」欄などに寄せられる悩み相談の中で、家父長的な夫（父）の専横や「家」の嫁として義父母への忍従を強いられる訴えが、あとを絶たないことからうかがえる。（逆に考えれば明治民法以後半世紀ほどで、これほどまでに普通の人々の社会的構造的に強く根を下ろした家制度意識は驚異に値するとも言える。なおこれに果した「主婦の友」文化などの役割については後でふれることにする。）

③ しかしこうした状況も高度経済成長がその峠にさしかかった1970年頃から変化を見せ始める。人口学的には、戦後の団塊世代が婚姻・出産年齢にさしかかったことであるが、それは単に戦後世代の家族数が増えたということではなく、戦後の教育・文化を体現した人々が生殖家族の主役として登場して来たことを意味する。戦後間もないころ接吻映画を好奇と驚きの目で見た世代とは異なり、個の尊重と男女の平等、そして、夫婦結合におけるロマンティックラブの重視を青少年期以来深く体験して来た世代なのである。

第2は高度経済成長の果実としての生活装置の変化である。家庭電化製品の普及は家事労働の質を変化させたし、余暇・娯楽も、家族内の年中行事的なものから外での活動へウエイトを移して行った。意識の形成に重要な役割を果たす

情報の伝達も、質量ともにおおきな変化をとげる。家の内にあつて外部情報と接することの少なかった主婦も、居ながらにして世界の動きを知ることができる。西欧におけるウーマンリブの波も、数年を出でずして日本社会をあらうことになったのである。家父長制的支配どころか、「主婦の友」的夫唱婦随の勢力関係や性別役割観にさえ大きなゆらぎが生じて来たのは当然といえよう。こうした物的装置やマス・コミ（時としてそれはイデオロギー装置と言われる）によって形成される疑似環境が普通の人々のありふれた日常生活世界（その中で家族は大きな位置を占める）についての社会的構造感（とくに家族・夫婦関係）にどのような変化をもたらしつつあるか、それもまた大きな課題の一つである。

夫婦のあり方についての関心を促した第3の要因は家族生活周期の変化である。世界に類を見ない急激な出生率の低下と平均寿命の伸長の結果、末子の結婚の後15年、20年という長い子育て後の期間を持つことになった。戦前において末子の結婚は父母の何れかの死亡時期とほぼ時を同じくしており、そこでは夫・妻として相對するよりも父・母としての役割遂行者としての側面の方が優先していたのである。しかもこの長い子育て後の期間を子夫婦とは別居して、夫婦だけで生活する傾向は増えつつある。この長い期間を、いわゆる“かすがいとしての子”がいなくなった夫婦がどう暮らすかは、人々にとって重要な関心事であり、生涯の伴侶ということの意味もあらためて問いなおす必要が生じて来たのである。

④ さらにまた、1980年代以降になると、全く別な思想的流れとしての“性”が、夫婦関係論にも大きな影響をなげかけつつある。フェミニズムないしはジェンダー論という根源的課題にまでは視界を広げないにせよ、夫婦関係において重要な（必要条件ではないにせよ）位置を占める性が狭義の性革命によってゆらぎつつあることである。婚姻外性関係の深部での進行と、別居結婚・契約結婚など、伝統的一夫一婦婚とは異なる形の夫婦関係への志向、という2つの

側面から夫婦における性とは何か、一組の男女の結びつきとは何かが問われようとしているとも言えるのである。（我妻洋『性の実験』、1980）

これに対し我が国の家族社会学において、先にもふれたように夫婦関係そのものに焦点をあてた研究は余り進められなかったように思われる。「家」の継承を第一義とする伝統的な家族にあっては子を生み育てることが第1の責務であり、「腹は借物」に象徴されるように、その手段としての嫁の性格が強かったし、「家」を守るための夫唱婦隨的協力はあっても情緒的な結合は軽視された、したがってまた、それを追求しようという関心も低かったのであろう。近年、離婚、別居などの家族病理や、高齢者家族、単身赴任など家族福祉的観点から夫婦関係に関心が向けられるようになったが未だ十分なものとは言えない。実践的な課題への意味からも家族研究の上からも、大きく変化しつつある夫婦関係についての実証的研究の意義は少なからざるものがあると考えるのである。

（2）理論仮説と作業仮説

① 本研究の大きな枠組の1つとして共同研究者の一人である上子武次は次のような（変動論的）概念図式を仮説として提示した。

独裁型家族主義→融合型家族主義→契約型個人主義→純粹個人主義 それは家族（中心）主義（familism）から個人（中心）主義（individualism）という大きな流れを軸として、共同性の強さおよびその力の所在を加えた3つの基準によって区分したものである。それによれば独裁型家族主義は家族全体の目標や必要が1人の家族メンバーによって定められ、しかもその順守が強く求められるものであり、典型的には〈家父長家族〉に見られる。それに対し融合型家族主義では、家族全体の（目標の）ために成員の個人的欲求はある程度抑えられ、あるいは目標のための自発的協力が求められるが、その目標は家族メンバー（現実には主として夫と妻）の合意によって定められる。ここでは〈調整〉、

〈調和〉が重視され、過度に〈個〉を主張することはよしとされず、共同性、とくに共属感情が重視される。両性の平等の上にたった〈夫婦家族〉の理想像といえよう。

これに対して契約型個人主義は、対等な独立した2人の個人の性的関係を伴った同居生活であって、個人の欲求が共同性より優位を占める。個人の欲求充足にとって必要な限りにおいての共同性というニュアンスが強く、契約はその限度の設定という性格をもつ。典型的には生活共同の期間や内容の契約という形であらわれる。いわゆる同棲には、多様な形態があるが、その多くは基本的に上述の性格のものであろう。（但し日本の内縁関係など、法律婚でないというだけのものは、むしろ夫婦家族に近い）

最後に純粋個人主義とは相互の依存性を排し、プライバシーの侵害を拒否する立場であって同居を前提としない。いわゆるシングル（singles）の生活がそれであって、性的な相互拘束もなく、反復的な性交渉はあっても両者の欲求が時間的、空間的に一致した時に限られる。すべての時間とエネルギーは自己の目的と欲求にのみ使うというのが理念型としての純粋個人主義である。

もちろん、これらはあくまで家族（中心）主義の極から個人（中心）主義の極への連続体の中に類型的に位置づけたものであり、現実の家族はその連続的スペクトルの様々な点に位置する。

とすれば現代日本の家族はその何れの点に位置しどう動こうとしているのか、その現実態を折出することが第一の課題となろう。

② 現代家族における夫婦関係が、独裁型家族主義のもとにおけるそれから、どの程度融合型家族主義へ移行しつつあるのか。さらにはその中で、契約型個人主義的な色彩を帯びた夫婦関係の萌しが見られるのか。それは移行に伴う夫婦間の葛藤、対立の中に見出せるであろう。

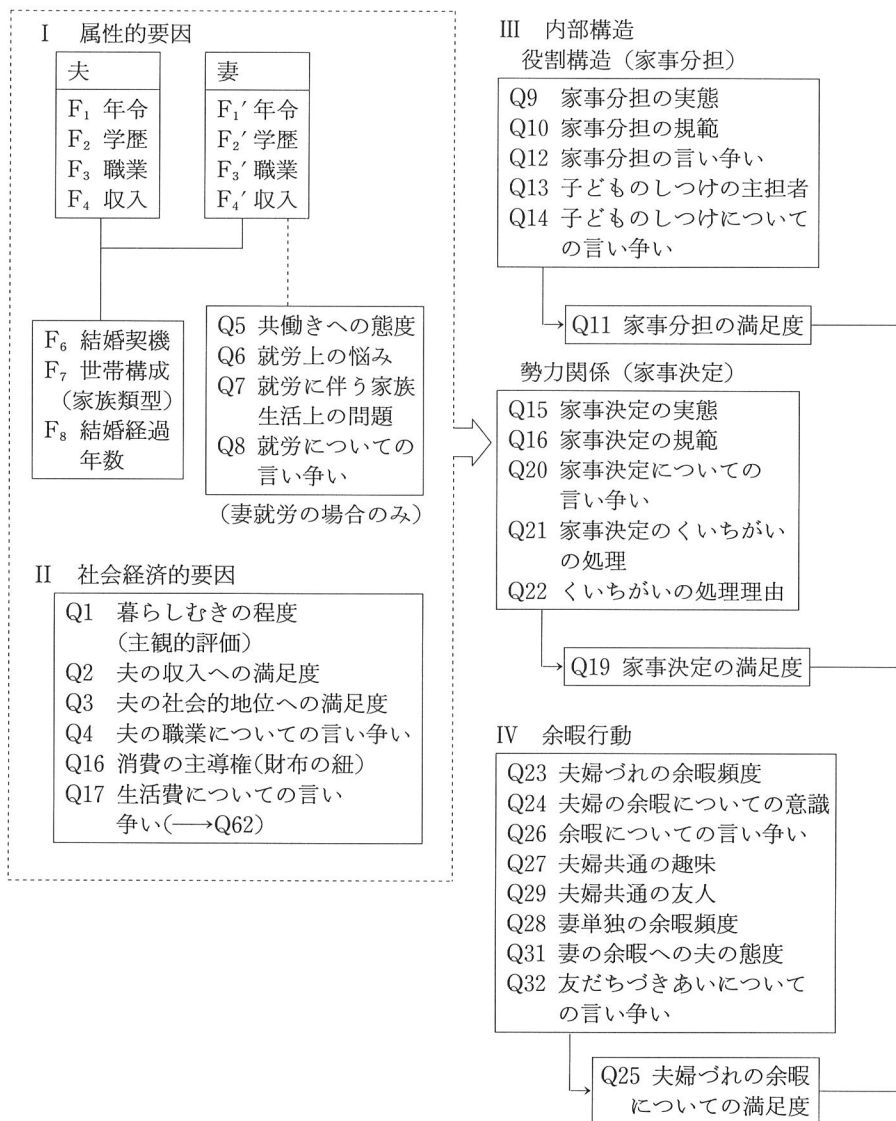
これまでの伝統的家族では、家父長主導の家族体制の中で家事経営、家庭団

らんが自明視され、家族の和の名のもとに夫婦間のあつれきや対立は妻が折れる形で抑制、隠蔽されてきた。しかし近年両性平等のイデオロギーのもとにそれらは表面化、増大、深化しているように思われる。離婚の内容がかつての夫側からの一方的離縁から、妻の申し立てによるものが多くなっていることにもそれがあらわれている。

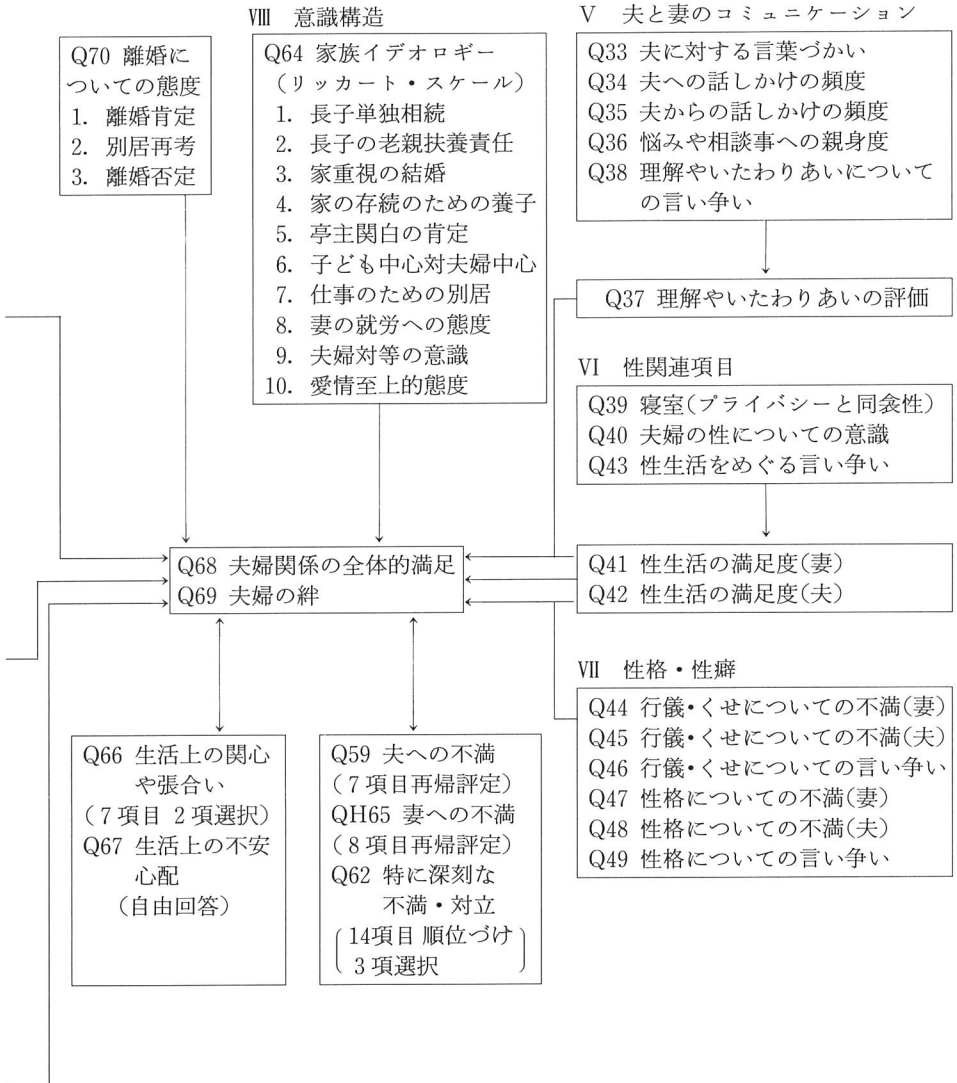
具体的に言えば、夫の家父長的権威を背景とする夫婦の勢力関係の変化についても、①夫・妻それぞれの旧意識の残存と平等意識の程度、および夫婦間のズレ、②意識のズレ、現実のズレ等の結果としての対立、葛藤の深刻さ、③対立が起こった時の処理の仕方など、多くの側面を総合した分析を必要とする。同様のことは役割関係における役割規範、役割期待と遂行度のズレや満足度・不満・対立をはじめ、性関係、余暇活動、夫婦間コミュニケーションなど多様な局面について分析する必要がある。

これらの中で、不満・対立、対立の処理など夫婦間のズレに関する設問は、従来の家族研究が、融合型家族主義をモデルとしたものであり、家族（集団）の維持・存続のための〈適応〉〈調整〉という均衡論や発達論に依據することが多かったのに対し、最近のアメリカにおいて有力となりつつある交換理論アプローチ^⑦、闘争理論アプローチを取り入れたものである。そこではもっとドライな交渉、談合（negotiation）や、対立・葛藤など、契約型個人主義のモデルにも適応し得るものが考えられている。それはこうした傾向がすでにアメリカでは日常的なものとなり、さらには純粹個人主義の萌芽さえ見られるという現実態の変化に対応した不可欠のアプローチとなりつつあることを示すものであり、同様のアプローチはゆれ動く日本の夫婦関係の研究にも必要であろうと考えられるからである。それらを分析図式化したものが表1である。

【表1】 夫婦関係分析の



フレーム・オブ・レファレンス



(3) 統計解析的分析と意味構成的解釈

——二つの方法論を交差させて——

前述のような目的と研究枠組によって行われた調査の統計解析の詳細は、その研究報告書である『現代日本の夫婦関係』（1992、関西家族研究会）にゆずるが、始めにものべた本稿の視点に立った新たな角度からの再解釈、ならびに上記報告書では触れられなかった先行研究との時系列的比較分析、とくにその際の社会的なエスノグラフィックの詳細としての歴史的背景を付与した解釈などについてのべていくことにする。

① 分析と解釈の基本的前提

ほぼ定成化されたといっている伝統的統計調査法に従えば夫婦関係の諸側面（家事分担、勢力関係、余暇行動等）およびそれを規定する諸要因（年齢差、学歴、職業等）について分析的に細分化し、その要素間の相関などを経験的一般化法則（R・K・マートン）として見いだすという方法が主であった。それは事象を全体的関連の中でゲシュタルト的にまるごと捉え、それを洞察的に解釈するという賢者の学の方法をとらない実証的研究において止むを得ぬことである。しかし同時に各部分の分析のみで、全体像の復元的再構成に至らぬまま終わってしまった研究の多いのも事実である。我々の前記報告書もその感のあるのは否めない。しかしながらこの問題は非常に難しい。数量化された各特性値をいかに尺度化、指数化してみてもそのこと自体に伴う操作性の増大、単純化することによるバイアス、誤差の混入を免れ得ず、せいぜい二次近似的モザイク的全体像となって、意味のある全体像とはなり難いのである。我々の場合「夫婦関係の全体的満足」と各変数間の相関を探ってみたところ^⑧、ほぼすべての変数と関連があることが分かったが、その有機的、全体像的関連を見いだすことは不可能に近い。むしろ多くの要因が複数にからみあっている得も言えぬ微妙な関係であることが分かったという皮肉な結果になったのである。従って

〔表 2〕 全体の満足との相関

| (変数名) | (カテゴリー) | (結 果) |
|----------------------|--------------------------------|-------|
| | | 夫 妻 |
| 見合い・恋愛 | | — * |
| 現在の年齢 | 20・30代, 40・50代, 60・70代 | * ** |
| 結婚期間（年数） | 0-9, 10-14, 15-19, 20-29, 30以上 | * ** |
| 現在の家族構成 | 夫婦のみ, 夫婦+未婚の子, その他 | — — |
| 妻の現在の就業 | あり, なし | — — |
| 主婦の就業 | 賛成, 反対 | — — |
| 暮らし | 余裕あり, 苦しい | — ** |
| 決定の処理 | 自分の考え, 話し合う, 相手の考え | ** ** |
| 余暇活動の共同 | スコア | ** ** |
| 配偶者の友達づきあい | 好感をもつ, 不快感をもつ | — ** |
| 配偶者への話しかけ | 話す, 話さない | ** ** |
| 配偶者の話を聞く | 聞く, 聞かない | ** ** |
| 理解やいたわりあい | うまくいっている, うまくいっていない | ** ** |
| 夫の職業に関する言い争い | ない, ある | ** ** |
| 家事分担に関する言い争い | ない, ある | ** * |
| 子供の躰に関する言い争い | ある, ない | ** ** |
| 生活費の使途に関する争い | ある, ない | ** — |
| 大事なことの決定に関する言い争い | ある, ない | ** ** |
| 余暇に関する言い争い | ある, ない | — ** |
| 友達づきあいに関する争い | ある・めったにない, 全くない | — — |
| 理解やいたわりに関する言い争い | ある, ない | ** ** |
| 性生活に関する言い争い | ある, ない | — * |
| 家庭での行儀に関する言い争い | ある, ない | ** ** |
| 性格に関する言い争い | ある, ない | ** ** |
| 夫の収入への満足 | 満足, 不満 | * ** |
| 夫の社会的地位への満足 | 満足, 不満 | — ** |
| 配偶者の家事分担への満足 | 満足, 不満 | ** ** |
| 大事なことの決定への満足 | 満足, 不満 | * ** |
| 余暇活動への満足 | 満足, 不満 | ** ** |
| 性生活への満足 | 満足, どちらでもない, 不満 | ** ** |
| 配偶者の行儀への不満 | ある, ない | ** ** |
| 配偶者の性格への不満 | ある, ない | ** ** |
| 配偶者の親・親戚とのつきあいに関する不満 | ある, ない | ** ** |

* : $P < 0.05$ ** : $P < 0.01$

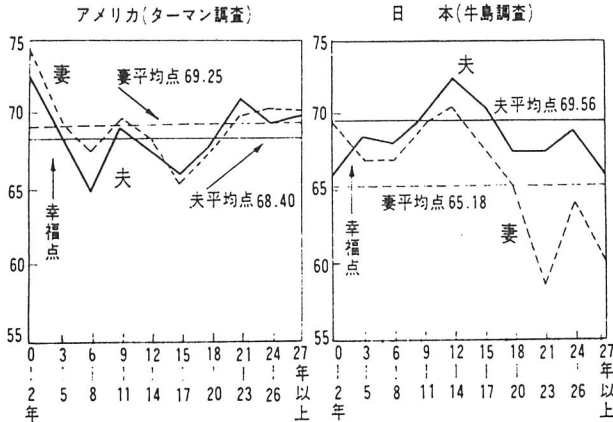
あまり数理的操作を行わず、「話し手の明言せぬ意味を聞き手が補足的に意味付与して解釈する」と似た意味、すなわち「視界の相互性の原則」（A. シュッツ, 1961）や「エト・セトラ補充の原則」（H. ガーフィンケル, 1967）によって回答者が答えたまま（換言すれば、選択肢の一つに付けた○印のまま）のデータをエスノセマンティック的に、各質問の構造関連ではなくて意味連関を文脈状況再帰的に解釈する方法をとろうということである。このことはまた、回答者は質問文を彼等の社会的構造感によって意味付与し、それに反応しただけであって、それ以上のこと（調査者がその質問に付与した理論レベルでの概念）は何も語ってはいないのだという最も基本的な自明のことの再確認でもある。ただし、概念変数分析のように調査設計の段階から十分に上記のことに留意して行われた分析は十分妥当性をもったものであるし、ダブル・トリプルクロスにおいて我々の通常の思考では考え得ない深層構造を気付かせてくれることもあり、テーマによっては十分の有効性・妥当性をもったものであることも付言しておきたい。さらに解釈ということについてもそれは理論的、方法論的裏付けのない解釈ということではない。サザーランドの古典的な事例にもあるように「安易な事後解釈をつつしむ」という調査屋の戒めが自明のものであることはいうまでもない。

② 結婚満足（幸福）度の測定と解釈

これについては、古典的とも言える L. M. Terman の結婚幸福度の測定（1938）や、Burgess & cottrel の結婚適応の予測（1939）をはじめアメリカでは数多く行われており、我国では前者を踏襲した形の調査が牛島義友によってなされている（『家族関係の心理』1955）

それによれば（図1）アメリカの場合（ターマン調査）結婚当初、夫も妻もかなり高い幸福点を示しており、結婚経過年数6～8年でいったん落ち込むがその後持ち直し、次いで15～17年頃に夫・妻とも再び65点台に低下するがその後は

〔図1〕 結婚経過年数による幸福点の変化



ほぼゆるやかに上昇し、21～23年以後はほぼ70点前後で横這いとなる。夫・妻ともほぼ平行して変化しており、結婚後15～17年までの前半は妻の方がやや高くそれ以後は夫の方が高い値を示しており、全体を通じての幸福点は妻の方が高い。

これに対し日本では(牛島調査)、結婚当初の夫の幸福点は66点と妻よりも低い。3年を経ずして夫の方が高くなり、以後夫の方が高いままである。幸福度のピークは夫・妻とも結婚後12～14年で以後漸減傾向をたどる。とくに妻の場合その落ち込みは著しく21～23年には60点を下まわる。結婚後27年以降は夫65点、妻60点と最低水準のままで、平均は夫の方が妻より4点も高い。

もちろん、これらのデータは同一の夫婦を追跡したものでないから疑似ライフサイクル的变化であり、コーホート要因が無視されるという限界があること、結婚生活を諸側面に分け、それについての評定値をスコア化したもので、研究者により、家族生活の領域の選定や評定における段階区分等が異なるので妥当性などに問題はあるが、筆者の言う一次近似的比較は可能であろう。これにつ

いての説明は家族社会学の教科書などでも述べられているので詳しいことは省略するが、大まかに言って、結婚がロマンティックラブの結果であるアメリカでは結婚当初の満足度は当然高いが、その後結婚生活のシリアスな面（経済面、人間的ホンネがあらわれるという意味での性格の相異等々）にぶつかることによって幻滅とっていいような不幸福感に襲われる。その危機点が6～8年であり、それを乗り越えた夫婦は安定を取り戻すというのである。ただ後半の幸福点の上昇は、7～8年期に破局に達した夫婦は離婚してしまうので、それ以後は危機を克服した夫婦だけになるからであるという補正的説明もある。（その後アメリカで“七年目の浮気”〈原題 seven Years Itch〉という映画が製作されたが、何らかの意味で七年目が一つのエポックであることを劇作家の感性でとらえたものと解するならば、調査結果と符合するとも言えよう）しかしこれに対し、さらにその調査時期が、失業率32.0%（1932）に達した大恐慌を経て次第に落ち着きを取り戻した30年代後半であること。専業主婦として家を守る貞淑な妻というピューリタンのイメージ（人々の家族についての社会的構造感）に大きな衝撃を与えたキンゼイ・レポート（1948、53）より約10年前であるという状況的文脈を付与してかんがえと、よりリアリティをもった解釈が可能であろう。この問題を解釈するというのが本稿の主題ではないのでこれ以上より多くのエスノグラフィックな詳細を収集して追及することはしないが筆者のめざす方向性はこうした点にあるのである。同様に我国の場合も、戦後まだ10年を経ない調査時期、すなわちほぼ全員が戦前の良妻賢母の教育を受け男尊女卑の社会的傾向が未だかなり残っている時代で、大部分が見合い結婚（男女共学の新学制は1947年）であり、親夫婦との同居が約半数あることを考えると、教科書の説明とはかなり異なった（そして恐らくより実情に近い）解釈が可能であろう。ちなみに1947年の日本人の平均寿命は男50歳、女54歳であり、結婚経過年数9～11年はほぼ親との同居が終わりを告げる時期である。そして親と同居してい

る嫁にとって最初の数年は徒弟修行的な時期なのである。このデータと意味的
 連関をもつであらうと考えられる他の調査（労働省婦人少年局、1952年^⑨）によ
 ると、当時の農村において嫁と姑の家事分担は「献立の決定」を主として行うの
 は姑が90.1%、嫁は6.6%、「炊事」を主として行う割合は姑53.6%、嫁15.9%
 であるのに対し「洗濯」、「裁縫」、「掃除」は姑が10%前後、嫁が30%前後（他
 に娘が25%前後）である。中核的役割は主婦権の意味をこめて姑が、そして周
 辺的使役的役割は嫁がさせられるという構図が色濃く滲みでているのである。
 さらに驚くべきことには子守（育児）を主として行うのは姑35.1%で嫁は0%
 「その他」つまり義父、年長の姉等が54.3%なのである。農家において嫁は勞
 働力であるといわれることの裏書であらう。前述の牛島調査は農村部のものだ
 けではないので、この状況を直ちに牛島調査の解釈の社会的文脈として用いる
 ことはできないが農村での嫁の幸福点は「しゃもじ渡し」（主婦権の移譲）がある
 まで極めて低いであらう事は容易に理解できよう。都市部においても農村出身
 の一世から二世が主流を占めていた時期であるから、彼らの社会的構造感には
 労働省調査が示すような情況が原風景として存在していたことは確かであらう。
 これも又、より多くの関連する有意な人口学的データを用いることによってよ
 りリアリティをもった解釈を行い得るであらうが、本稿では割愛することにし
 る。

筆者の言わんとするのは、人文科学においても、ある歴史的事実や賢者の思
 想を明らかにするのに、単に正史や著作物の解釈だけでなく、関連性をもつと
 思われる日記やメモ、巷間の古文書に至るまで有意味な資料を収集し、エスノ
 グラフィックな文脈への着床によって意味を付与するのと同様、自然科学的
 といわれる社会調査にも人口学的データや社会史資料を駆使してより実像に迫る
 という方法論的手続きを取り入れることなのである。（尚その際に、データの遠
 近法的位置付けが必要なことは言うまでもない。また最近多くの国でブームと

なっている各種の社会史の出版も調査データに社会的文脈を与えるものとして、同じ流れのものと解することができよう）

③ 勢力・役割関係と結婚満足度

家事決定や家事分担のあり方を幾つかの家事領域に細分化した上で相加評価するというブラッドとウォルフ以来の伝統的な方法によって役割・勢力関係を見た場合、例えば家事分担の遂行では、日曜大工的仕事を除いて妻が主としてまたは専ら行っている率が90%を越えており、誰が分担すべきかという家事分担規範では若干夫も参加すべきという率がふえるが、全体として規範、実態とも伝統的性役割パターンから抜け出しているとは言えない。そしてそのことに対して「ほとんど又は全く言い争いもなく」（Q. 29）大部分の妻（73%）は家事分担に満足しており、それが多くの普通の妻たちの当たり前感として社会的構造感の一部をなしているのである。

しかしこの事も、例えば家事分担規範で最も夫の参加期待の高かった掃除の項目（夫も妻と同様にすべきである：20%）が、掃除機による掃除であって、箒と雑布によるそれではないことに留意すべきであろう。ましてさきの労働省の農村婦人調査にもあったように、それは三世代家族において主婦の仕事ではなく嫁が周辺的家事役割としてやらされていたという歴史的文脈を付与して考えるならば、果して同僚家族的性役割の柔軟化が進んだのかはどうかは疑わしい。それは意識の変化というよりは、掃除や洗濯がかつてのような労働でなくなったことが大きく作用しているのであって、戦前のような労働であれば、「夫も同じくらいすべきである」とはとても答えないであろう。

勢力構造についても同様である。調査した6つの家事決定領域の何れについても、「夫婦相談してきめるべきだ」（規範）という回答が60～80%に上がり、実態においても一致型（syncratic type）が最も多い。そして全般的にはやや妻の方が力が強い。（たとえばいわゆる財布の紐を握っているのは71.3%が妻で夫

は24.0%である）しかし「大事なことの決定で意見がくいちがった時の処理」という緊要性（critical incident）のある場では、47.1%が夫の考えに従い、妻の方は14.8%、一致するまで話し合うが33.4%であり、しかもそのことに大多数の妻が満足している（Q. 19）。さらに夫の考え通りにする傾向は、妻が夫の収入、社会的地位に対して満足度の高い程大となる。

勢力・役割関係を通してみた以上のような傾向はより細部にわたっての分析（前記報告書参照）においてもほとんど変わらない。ということは表2の「全体の満足度」とその変数である勢力・役割関連項目との相関も先行変数として夫の社会的地位や収入（ならびに妻のそれへの満足度）があると解するほうがよいであろう。欲求資源說的に言えば妻が夫の資源を使うことなしには自分の欲求を満たせないと認知することが、夫の妻に対する勢力の源泉となるのである。（その事の確定にはトリプルクロス等より詳しい分析が考えられるが、変数のカテゴリーが yes・no の単純化されたものが多いことからくる妥当性の問題、サンプル数が800程度で各コラムの数がすくなくなることからくる信頼度の低下などがあり、むしろ本稿では意味関連にウエイトをおいた解釈的方法を試みようとしているのである）。

夫婦間の勢力と役割関係についてフェミニストは、家父長制という概念を拡大して再定義した。それは「男性が女性を支配し、年長の男性が年少者を支配する」社会構造であるという。拡大家族における「父の支配」も、「夫婦家族」における「夫の支配」もともに家父長制の変種であり、「両性の平等と合意」の見かけのもとに戦後の「友愛家族」が成立したように思われたが、法的平等の背後に性別役割分担による社会・経済的不平等のあるところでは戦後家族においても「夫の支配」は継続したというのである。そしてその源泉として、家族という私的領域におけるシャドワークとしての家事の劣位を問題とする。^⑩

この指摘は恐らくほぼ大方の認めるところであろう。ただ筆者が追究したい

のは、それが多くの普通の人々の当たり前感としてどの程度残っているかということなのである。それが強く残っているところでは、伝統的性別役割分担に何の抵抗感もなく「まあ満足」でさしたる言い争いもないだろう。また陽の当たる外の領域で高い収入と地位を得ている夫の支配は当然のこととして納得するであろう。前述の調査結果はそうに読めるのである。（そのことの可否を問うているのではない）

しかしこの「シャドーワーク」でさえ、やはり歴史的な概念としての限界という以上に、それぞれの社会的状況において人々によって付与された意味には大きな落差があり、その背景知なくしてはより実像に迫った解釈はできないであろう。

高群逸枝らによれば、我国において主婦というものの地位が次第に明確になるのは鎌倉時代の頃からである。夫婦別居が普通であった「妻問婚」（7世紀頃まで）から男が妻の家に住み着く（matrilocal）「招婿婚」（10世紀頃まで）へ、そして平安末期になってはじめて新居（neolocal）での単婚生活が営まれるようになったという（「招婿婚から嫁取婚へ」高群逸枝全集第4巻）。しかし依然として夫婦生活の後見の義務は妻方の親族にあり、明治民法の形に近い嫁取婚は武士階級を中心とし、鎌倉時代から次第に一般化して来た。そして複合家族的形態や本・分家連合等の変形をも含めて家父長制的家長権の成立した16世紀頃には同時に主婦権も成立していたと言われる。典型的農家であっても家長の座る横座、隠居や客人をも含めた座であるムコ座と共に主婦の座であるカカ座は、勝手、タナモトとも呼ばれ、消費生活財の貯蔵と分配の権限をもったものであり、まさに男子厨房に入るべからずであった。低かったのは嫁の地位であり、「女子衆」と共に木尻という最も土間に近い側、囲炉裏にくべる木の煙の出る側（木尻）にその座があったとされる。主婦は家の女あるじであり、家事労働に従う同居の親族女性や奉公人を指揮する地位にあった。もちろんこうした状況が顕著に

現れるのは、豪農、豪商においてであろうが、程度を低めた形で庶民階級にも行われるようになっていったとみていいだろう。先にあげた労働省婦人少年局の農村調査（昭和52年）における主婦（姑）と嫁の労働は、まさにこの事を裏書きするものである。

この意味で主婦労働と家事労働とは区別して考えるべきであろう。筆者がさきにもべた役割分担の区分によれば、権限的中核的役割と使役の周縁的役割に近いものであり、近代家族において後者はしばしば奉公人（下女）が行うものであった。そしてそれは明治期の「官員様」から大正、戦前の昭和期にかけて中上層のホワイトカラーにまで広がり、女中をかかえた家はそれ程珍しい事ではなかったのである。

しかしその後、女工、女中に代表される低賃金労働への就労者は電話交換手、デパートの女店員等の新しい職場の出現などによって次第に減少し、同時に家事労働の省力化（電気・ガス）、家族数の減少（都市への人口移動はほぼ核家族化することを意味する）によって家事労働はほぼ専業主婦の労働を意味するようになる。

ただ余りに単一的なモデルを構成することは誤りを犯す危険がある。W. G. オグバーンが1930年頃の社会的傾向（Recent Social Trends in the United States, 1933）の中で、農家の3分の2、都市家族では9割までがパン工場製のパンを食べており、家庭でパンを焼く家族は予想以上に減少していたことをあげているが、それだけでなくビン詰やジャム等の保存食づくりを含めて、20世紀初頭頃の近代家族の主婦労働は、上述した様な中間層以上の主婦や家父長制家族の主婦とはちがっていたのである。

筆者の現実体験として昭和15年における東京近郊の農村（現筑波市付近）では、井戸水を汲み上げ、稲藁で米を炊き、洗濯板で洗濯をするという生活であった。さらに漬物を漬け、味噌を仕込み等々、中農以下の主婦の労働量と熟練

度は、とても他にとってかわれるもののない程であった。シャドーワークどころか家族という私的領域においては生活のかなめをなす陽のあたる労働であった。

この意味では、かつての主婦の地位は二つの層に分化していたと言えよう。一つは家父長制的拡大家族（同族団をも含む）における家事主宰権者としての主婦であり、いま一つは中間層以下の農婦を典型とする家族のかなめの太陽的存在の主婦である。もちろんこれは農婦のみに限らない。ジョン・フォード監督のアカデミー賞の名作「わが谷は緑なりき」の炭鉱夫一家の主婦もまた一家の太陽であり、彼女のいない一家など考えられぬ程の存在感をもっていた。

石垣綾子の「主婦第二職業論」（婦人公論1955年2月号）から磯野富士子の「婦人解放論の混迷」（朝日ジャーナル1960年4月）に至る主婦論争での主婦像は上述の何れ的主婦でもない。都市部のサラリーマンを夫とし、家事・育児専業の妻と子供が二人という、今日の所得・支出統計などにおいて標準世帯とされる家族において、省力化された家事労働の中にあってもなお「際限のない家事」（S. ストラッサー）に追い立てられる主婦の像であった。

（人口学的データでは、1955年には全就業者中雇用者の比率は45.7%であり、1960年に53.9%と逆転する。但し自営業＋家族従業者のかかなりの数がライフスタイル的にはサラリーマン的就労形態をとっているから、1950年代の初めには現実には50%を越えていたであろう。また都市部人口比率も戦前（1940年）32.7%あったものが（戦災等のため1945年には27.8%に減少する）1950年には37.3%、そして経済成長が本格化した1955年には一気に65.1%と激増する。ちなみに1985年には雇用者の比率75.4%、都市部人口比率76.7%である。しかし主婦論争で女性論者等が論じた家族・主婦像は、かつて『主婦の友』がその読者のターゲットとしたように上述の都市部新中間層を先取りしたものであったと考えられる。）さらに一歩論を進めるならば、我々の調査項目に回答を寄せてくれ

た普通の主婦の多くは、そうした家事主宰者的主婦像や、超人的に家事労働をこなした大黒柱の主婦像ではなく、また主婦論争で焦点となった家事労働の意味付けとは次元を異にした世界において、『主婦の友』世代の親から、家族や夫婦像についての一次的パースペクティブをかなり強固に付与され、戦後の教育や言論界でのフォーマルな理念やイデオロギーは余り浸透しないまま、伝統的性役割や勢力関係を当たり前の受容し、時にはそのように自己呈示しようとさえする人々ではなかろうか。我々の調査において「夫婦は対等に話し合える友達のような関係が良い」というやや立て前表現に対しては圧倒的に（夫75%、妻80%）賛成が多いのであるが、日常会話的にくだけた表現「夫婦の間はどちらかというと亭主関白の方がよい」という設問に対しては賛否相半ばするのである。（表5）

④ 不満・対立から見た夫婦関係の陰影

1956年の調査（名古屋大学^⑩）において配偶者に対する欲求不満としてあげられた中のおもなものは、全体として夫、妻とも性格に関するものが多く、夫は妻をヒステリック（短気・神経質）で、すぐ文句を言う（不平、小言）と不満をのべているのに対し、妻は夫のわがままで短気（時には暴力もあると推定される）なことをあげている。ついで夫は家のやりくりについての不満が多く、妻は家事に対する夫の関心のなさと思いやりのなさに不満を抱くことが多いというものであった。そしてこれは我々の調査で（1980年：表3）（ワーディング等が異なるので絶対的な不満の程度は比較できないが）夫の妻に対する不満では、
 ①口数が多くすぐ文句を言う ②家の中が散らかりっぱなし ③家計のやりくりが下手の順に多く、妻にとっては、①家のことを何もしてくれない ②妻の気持ちを理解してくれないの二つに不満が多いのと傾向としては殆ど同じである。前者は1920年代生まれが主体、後者は終戦前後（1940年代）生まれが中心というかなり大きな出生コーホートの違いから見ると理解の難しいところであ

【表3】 不満領域と不満スコア

(a) 妻の不満スコア

| 不 満 領 域 | ス コ ア (不満点) |
|---------------------------|----------------|
| ア. 家のことを何もしてくれない | 1.05 |
| イ. 悩みや困ったことの相談にのってくれない | 0.51 |
| ウ. 買い物や旅行などにいっしょにいてくれない | 0.71 |
| エ. 妻の気持ちを理解してくれない | 0.90 |
| オ. 仕事やつきあいが多く、早く帰ってきてくれない | 0.76 |
| カ. 子どものことをかまってくれない | 0.56 |
| キ. 甲斐性がない（収入や地位など） | 0.45 |

(b) 夫の不満スコア

| | |
|------------------------|------|
| ア. よく外へ出あるく | 0.42 |
| イ. 夫の仕事やつきあいに理解がない | 0.35 |
| ウ. 口数が多い、すぐ文句を言う | 0.73 |
| エ. 家の中が散らかしっぱなし | 0.62 |
| オ. 家計のやりくりが下手 | 0.47 |
| カ. すぐ実家のことを言う | 0.29 |
| キ. 夫の親、きょうだいとうまくやっていない | 0.28 |
| ク. 子どものしつけを十分しない | 0.31 |

(注) 不満点のスコアは、
 そういうことは全くない…0、多少そういうところがある…1、
 かなり近い…2、その通りである…3と評点を与え相加平均した
 もの

る。いつの時代においても（それぞれの状況の中で）変わらぬ夫婦の期待のズレということなのであろうか。

同じく1960年代初めの全国のサラリーマン家庭の妻に対する調査（昭和女子大）における「夫婦げんかの原因」と我々の「夫婦間の深刻な対立・不満」を比較しても、（表4の1と2・但し子供のことという項目は子の有無による落差が

〔表 4-1〕 夫婦げんかの原因(M. A.) (1961～62年調査)

| 結婚年数 内 容 | 全 体 | 3 年 未 満 | 4 ～ 7 年 | 8 ～ 10 年 | 11～ 15 年 | 16～ 20 年 | 21～ 25 年 | 25 年 以上 |
|-----------------------|-------------|------------|------------|-------------|-------------|-------------|-------------|------------|
| 1 経済的なこと | 29.5 (%) | 21.2 | 26.6 | 40.8 | 24.8 | 31.9 | 34.5 | 30.4 |
| 2 性格の相違によること | 27.1 | 31.4 | 27.9 | 24.5 | 25.7 | 21.1 | 32.3 | 27.8 |
| 3 しゅうと・小じゅうとや親せきなどのこと | 21.7 | 23.0 | 28.5 | 29.6 | 23.4 | 29.9 | 24.2 | 16.7 |
| 4 情愛のもち方、示し方についてのこと | 18.0 | 27.6 | 18.0 | 20.1 | 17.6 | 16.1 | 13.4 | 14.3 |
| 5 夫の帰宅時間のこと | 17.0 | 22.6 | 22.6 | 24.1 | 22.9 | 6.9 | 6.4 | 7.8 |

(注) 全国サラリーマンの妻 2,433人 (昭和女子大 白石浩一)

〔表 4-2〕 夫婦間での深刻な対立・不満 (M. A. 1985～86年調査)

| 結婚年数 内 容 | 全 体 | 3 年 未 満 | 4 ～ 6 年 | 7 ～ 9 年 | 10～ 14 年 | 15～ 19 年 | 20～ 29 年 | 30 年 以上 |
|-----------------|-------------|------------|------------|------------|-------------|-------------|-------------|------------|
| 1 暮らしむき、生活費の使い方 | 34.6 (%) | 33.3 | 53.3 | 110.5 | 39.3 | 48.9 | 35.2 | 24.2 |
| 2 家でのマナー、性格 | 22.1 | 29.7 | 28.9 | 29.6 | 24.3 | 26.6 | 32.5 | 20.5 |
| 3 夫婦間のいたわりあい | 20.0 | 20.4 | 15.6 | 35.1 | 20.6 | 30.9 | 22.5 | 14.9 |
| 4 同居の親・親せき関係 | 19.0 | 20.4 | 22.2 | 27.0 | 28.7 | 29.4 | 22.1 | 12.6 |
| 5 余暇活動 | 15.0 | 13.0 | 13.3 | 24.3 | 15.0 | 17.0 | 17.1 | 12.3 |
| 計 | 878 (人) | 54 | 45 | 37 | 107 | 94 | 222 | 293 |

(注) 大阪市内878世帯の妻 (関西家族研究会)

激しいので省いてある・また数値そのものの比較は調査方法の違いから余り妥当でない。順位相関の考察に止めるべきであろう）両調査とも第一位は家庭経済にかかわることであり、第二は性格にかかわることである。3、4位は両方で順位が変わるものの夫婦の情緒関係と親族関係にかかわることであり、第5位のみが前者で夫の帰宅時間、後者で余暇の過ごし方と異なっている。

結婚経過年数による傾向を比較すると、前者で結婚後8～10年に経済的なことによる対立が最も高くなり、その後いったん低下するが再び21～25年に高くなるが、後者においても結婚後4～6年に最も高く、次にまた15～17年に高くなるというように、後者において5～10年時期が早くなるが傾向としては同じである。性格要因による対立も結婚当初と結婚後20年経ったところという点で同じ傾向を示す。

経済的要因は、B. S. ロウンツリーの貧困線研究と同じような視点でライフサイクルに対応した生活費と所得水準の変化からほぼ説明がつくと思われるし、後者は結婚前の双方のゴフマン的印象操作と、結婚後の舞台裏の行動（この意味の詳しいことは第V章においてのべる）との落差として、また子育てに集中せざるを得なかった時期（役割分担期）を終えて、あらためて相手を注視したときの意識として、マスコミの熟年離婚記事にのべられていることとほぼ符合する。

しかし、情緒関係、親族関係、余暇、帰宅時間については、歴史的・文化的文脈としての社会的構造感の変化を付与した解釈手続きが必要である。次節においてそれにふれたい。

⑤ 社会的構造感と夫婦関係満足度

K. ライターらによれば、社会的構造感は、社会的世界が「自然な秩序」であるという感覚や思い込みであり、「場の成員が認知し確信し、当然視しているものとしての日常的リアリティ感の構造」と定義される。ただしそれは構造化

され固定化したものではなく、人々の相互作用を通しての機会的生成物であり、不断の意味付与、解釈作用による進行形の達成物である。しかしここでは、ある時期において人々が当たり前視している物（意識）として一旦固定し、解釈作業の枠組として用いる。すなわち、現代人の最頻的（modal）家族・夫婦像を枠組として夫婦関係の調査データを解釈するのである。

夫婦関係満足度は本来結婚満足度とは異なり、より情緒的・性的要素が濃いものであろうが、この研究の盛んなアメリカでは通常 marital satisfaction, marital happiness, さらには marital success などの語でもって表現されている。本稿の研究題目が夫婦関係の研究というものであるため、夫婦関係満足と言う表現を用いることもあるが、いわゆる結婚満足度と同義と考えてよい。

ところで結婚満足度とは非常に主観的なものであり、かつ曖昧な概念であって、W. R. Burr も Theory Construction and the Sociology of the Family, (1973) において批判しているように、前述した多くの研究を含めて、研究者によって違った語が同一の意味で使われていることや、概念を変数化して分析する場合の操作的手続きの妥当性と多様化の問題などから家族社会学者の共有の知見として体系化されているとは言い切れない。各研究者のそれぞれのやり方に従って、それぞれの知見が得られたというのに近いであろう。

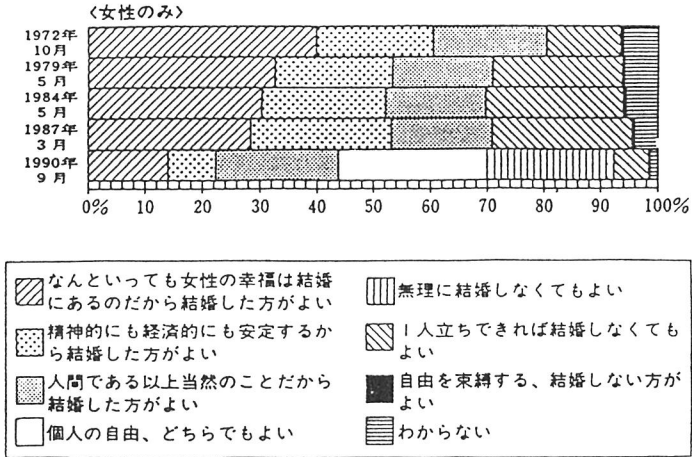
W. R. バーはそのうえに立ってまず概念の整理を行うが、筆者は、その曖昧性、主観性を前提としたうえで、普通の人々は結婚生活における満足や幸福ということはどう感じ、彼らの会話の中でどう表現しているのかという意味構成的視点から考察することにする。強いて定義するとすれば、むしろ心理学者の言う「結婚生活において、個人の生理的ないし社会的欲求が満たされた情緒の平衡状態」というのが最も包括的であろう。

結婚満足度が極めて主観的な判断を含んだものであるということは、それが多様な形をとるものであることを意味する。人々はそれぞれのあり方によって

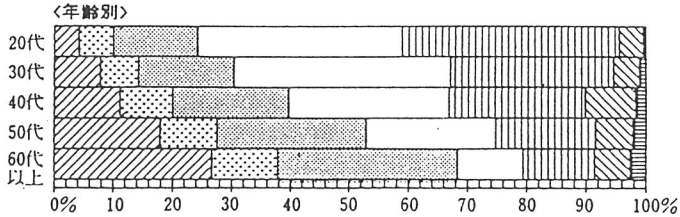
幸福であったり不幸と感じたりするのである。そしてそれは欲求のあり方と深い関連をもつ。この満足度と欲求の関係については見田宗介の「価値とは主体の欲求が満たす客体の性能」であるという価値の定義（『価値意識の理論』、1967）が大きな示唆を与えてくれるであろう。物的欲求の強い妻（主体）にとって稼ぎのよい夫（客体）は価値ある存在であり、妻の満足の源泉となり得るが、情緒的な反応を強く望む妻にとって、職業生活に専念する夫との結婚生活は満足のいくものではないであろう。同様の意味において、強い家父長的権威の中で育ち、それが彼女の社会的構造的な一部ともなっている妻にとっては専制的な夫とも、その点に関しての対立や不満は少ないであろう。さきにあげた「夫婦げんかの理由」（昭和女子大1961）や「夫婦の欲求不満」（名古屋大1956）において、調査項目の選択肢にさえあげられなかった「余暇活動についての不満」（周知のように調査の選択肢に取り入れられないということは、研究者自身の社会的構造的な意識に上がって来ない程のものであるということであるが、それは同時にその時代の普通の人々の意識においても同様であったと言ってもいいであろう）が、我々の調査では、「夫婦間のいたわりあいや理解についての不満」、「大事なことの決定についての対立」等について上位ないしは中位にあげられていることにもあらわれている（詳細後述）。余暇というものが家族・夫婦関係の中でウェイトを高めて来たこと、余暇（いわゆるレジャー）についてのマス・メディアの宣伝効果によって肥大化させられた欲求、それらが、主体の欲求を満たしてくれない客体（の性能）への不満となって顕在化したものと言える。

アメリカの場合、ブラッドなどがデトロイト調査で見いだしたものの一つに「妻にとっての夫婦関係の価値（メリット）」として「余暇・社交における同伴性」が第一に上げられていたということがある。以下「妻に対する夫の愛情の表出」と続き、「一定の生活程度の維持（経済的安定）」は第5位であった。幼

〔図2〕 女性全体の結婚観の変遷
出典：総務庁統計局「女性に関する世論調査」



〔図3〕 1990年における女性の年齢別にみた結婚観の変遷
出典：総務庁統計局「女性に関する世論調査」



児をベビーシッターに預けて観劇に出かけることや、社交の場における夫婦同伴が「自然な秩序」であるという感覚や思い込み（K. ライター）を裏書きするものであり、アメリカの家族関係、結婚満足度のデータを読むにはこの妻の欲求（結婚に期待するもの）が大きな解釈枠組となろう。夫婦中心のアメリカの家族対親子中心の日本の家族というような類型化的対比をする際にも上述の事を背景知として持つのとそうでないのとではそのリアリティは全く異なるので

ある。

したがって本稿の主題である「現代日本の夫婦関係」における満足・不満の考察においても、“欲求”の基本をなす結婚観「なぜ結婚するのか」という問いに対する回答の変遷から見ていくことにする。結婚願望が強いと言われる日本の女性について重要なことだと思われるからである（図2、図3）。

それによると、1972年当時「何と言っても女性の幸福は結婚にある」という即自的目的観（結婚目的観）は40%を占め、「精神的にも経済的にも安定するから」という結婚手段観が20%、「人間である以上当たり前」という結婚慣習観が20%で、いわゆる伝統的結婚観と思われるものが合計80%を占めていたが、1990年には結婚目的観が14%、手段観8%、慣習観22%で合計44%に減少している。さらに1990年調査について年齢別にみると20代では目的観4%、手段観6%、計15%と伝統的な結婚観は著しく減少している。そして「個人の自由、どちらでもよい」34%、「無理に結婚しなくてもよい」37%、両者合わせて約70%に達する。結婚を人生における重要なこととは必ずしも考えず、個人のライフコースにおける選択肢の一つとして位置付ける考えが、少なくとも意識の上では普通の人々の間にも広がりつつあるといえそうである。ただ、これも最近のフェミニズムの諸論調に触発されてのタテマエ論的ブームの影響がないとは言えず、現実には職場でのヒソヒソ話の中で（筆者は後にのべるようにこうした井戸端会議的な対話状況の中で強固な社会的構造感がくりかえし構成されて行くと考えている）追い立てられるように結婚して行くことが多く、それは新聞のルポルタージュや手記、人生案内においてよく見掛ける通りである。かつての『青踏』を初め『婦人の友』、『婦人公論』等の進歩的な啓蒙誌でのフェミニストの論調にもかかわらず結局は主婦の友文化の良妻賢母、軍国の母路線に席捲されたように、普通の人々の当たり前感はタテマエ論調によっては形成され難いようである。^⑪

〔表 5〕 夫婦関係意識

| | | 合 計 | 全 く 賛 成 | やや 賛 成 | やや 反 対 | 全 く 反 対 | 無 答 | ス コ ア |
|----------------------------------|---|--------|------------------|--------------|--------------|------------------|--------|-------------|
| A. 夫婦の間に愛情さえあれば どんな困難ものりこえられる | 夫 | 392 | 32.7 | 34.9 | 28.9 | 4.6 | 8.9 | 1.10 |
| | 妻 | 878 | 35.1 | 33.5 | 15.3 | 3.6 | 12.5 | 1.29 |
| B. 子ども中心よりも夫婦中心 に考えるべきである | 夫 | 392 | 17.6 | 44.4 | 23.7 | 5.6 | 8.7 | 0.90 |
| | 妻 | 878 | 15.3 | 37.6 | 26.4 | 6.4 | 14.4 | 0.44 |
| C. 妻が仕事をもつことは、夫 婦円満のさまたげになる | 夫 | 392 | 12.8 | 32.4 | 31.4 | 14.3 | 9.2 | -0.04 |
| | 妻 | 878 | 7.3 | 27.0 | 34.3 | 17.7 | 13.8 | -0.46 |
| D. 仕事のために夫婦が別れて 住むことはよくない | 夫 | 392 | 50.3 | 26.0 | 8.7 | 5.6 | 9.4 | 1.51 |
| | 妻 | 878 | 46.0 | 24.1 | 8.1 | 9.5 | 12.3 | 1.26 |
| E. 夫婦の間は、どちらかとい うと亭主関白の方がよい | 夫 | 392 | 14.8 | 48.0 | 22.2 | 7.7 | 7.4 | 0.51 |
| | 妻 | 878 | 8.0 | 36.1 | 30.6 | 12.4 | 12.9 | -0.09 |
| F. 夫婦は対等に話しあえる友 達のような関係がよい | 夫 | 392 | 34.4 | 40.8 | 14.5 | 1.8 | 7.9 | 1.36 |
| | 妻 | 878 | 45.6 | 34.4 | 6.0 | 1.4 | 12.6 | 1.83 |

（注） 1. スコアは全く賛成… 3、やや賛成… 1、やや反対… -1、全く反対… -3
の評点を与えて平均したもの

2. C、E、は+が伝統的夫婦意識

この総務庁のデータをより深く理解するため、我々の調査における「Q. 64 家族イデオロギー」（表5）の結果をみてみよう。

全体として「長子の単独相続」や「後継ぎのための養子」といった家制度的色彩の強い意識については、否定か賛成を大きく上回り、若い世代ではほぼ9割が反対である。今後それが常識的態度として定着して行くであろうことは、ほぼ間違いないといっている。

しかしそれがイエ意識の完全な払拭（心性の変化）なのか、形を変えて残存しているのかの見極めは難しい。上野千鶴子はそれを高度成長期以後に起きた爆発的な墓ブームに見る。都市化による大規模な世帯分離のあと、（近代的）核

家族の世帯主たちは、「……家の墓」を次に求めたのである。そしてそれを自分達のためにというより「子供達に迷惑をかけないため」といつくろうことで、いわば戦後的な「家の永続性」をめぐる新たなディスコースを獲得したと言うのである。その当否を直ちに評価することはできないが一つの解釈ではあろう。

さて、筆者らの調査でイエにかかわる意識は上述の通りであるが、夫婦関係に関する項目では、「夫婦の間に愛情さえあればどんな困難ものりこえられる」というやや現実ばなれした精神主義（回答者の質問文への意味付与の仕方についての日常知的知識にもとづいてこのようなワーディングにした）に対し賛成がほぼ70%に達するという予想を越えた数字となった。そしてそれをさらに明確にするためスコア化してみると、夫よりも妻に高く、妻の中でも低学歴に高いというほぼ日常的予測（低学歴ほど精神主義やタテマエに捉えられやすい）と近い結果が見いだされた。その他、「子供中心よりも夫婦中心が望ましく」、「仕事のために夫婦が別れて住むことはよくない」という態度についても、我々が日常生活の中で受け取る情報（それによれば母子癒着的子供中心が多く、単身赴任は日常茶飯事である）とは逆に、圧倒的多数が賛成というタテマエ的回答が得られた。しかし、それがタテマエであるとしても（ホンネであればなおさらであるが）そうした意識と現実とのギャップから生まれる不調和は、夫婦間の情緒関係にとって不安定要因となるであろう。

「妻の就労が夫婦円満のさまたげになる」という項目（Q. 69、ここでもあえて日常会話的夫婦円満というワーディングを用いた）に対しては、夫の回答は賛否相半ばし、妻も過半数が反対しているが、賛成も34%あり、態度をきめかねている無答が14%ある。パートを含めて妻が就労している家族が46%あり、その人達の「妻の就労をめぐる言い争い」（Q. 8）もほとんどまたは全くなく（68%）、全体としての夫婦関係満足度が「まあ満足」（スコア値3.8）であるという他のデータと意味適合的に関連させてみると、妻の就労が家族生活にも夫婦

関係にも大きな支障をもたらしていない生活実態に裏付けられた数字と理解することができる。妻の就労に対する意識は確実に少しずつ変化していると考えてよいであろう。こうした解釈の根拠として次のことが考えられる。

会話における「エト・セトラ補充の原則」（ガーフィンケル）を裏がえして言えば、現実とかけはなれたタテマエでは、会話者が本気でそう考えているとは誰も思わないであろうから安心して賛成と言えるのであって、タテマエがゆれ動いているとき、あるいはタテマエと現実が近づきつつあるときには人々はホンネの方を出すであろう。前2者の高率の賛成、後者の設問へのもろ手をあげての賛成へのためらいは、そのように解釈することがより適切であろう。

以上の様な家族イデオロギーと現実の墓ブームの状況などを文脈関連的に解釈するとき、系譜的家意識から脱したかに見えつつ、形を変えた戦後的な「家の永続性」への希求がみられること、タテマエと現実のズレの大きさ、タテマエとホンネの交錯など、過渡期的な家族イデオロギーのゆらぎが感ぜられる。むしろ、家族の実態がゆらいでいるというよりは、家族を規範化させるイデオロギーの方がゆらいでいるというべきかもしれない。

⑥ 生活のはりあい・関心と夫婦関係の満足・不満足

夫婦関係の満足度が価値意識論（見田宗介）における「主体の欲求」と強い関連があるとすれば、我々の調査における「生活のはりあい・関心の焦点」（Q.66）が、何れにあるかも満足度と大きな意味関連をもつであろう。シュッツ的言えば関心のあり方の体系は意味付与的認識をも規定するものなのである。

調査結果を（疑似）ライフサイクル的に妻の年齢とクロスさせると（表6）、20歳代～40歳代では「子の教育・子育て」が50～70%と突出して高い。子育てに要求される労力の大きさという意味でもそれが最大の関心事たらざるを得ないという状況、と共に、子は宝とされ、自己犠牲的愛情を当然のこととして要求される日本的近代家族像の影がうかがえるのである。そのような子ども

〔表 6〕 生活のほりあい・関心の焦点（M. A.）

| | 夫の 出世・ 成功 | 夫中心の 生活・ 愛情関係が | 子の 教育・ 子育て | 親しい友人との 家の外での活動 | *自分の 職業生活 | その他 | とく ずる こと は な い 感 | 無 答 | N |
|--------|-----------------|----------------------|------------------|--------------------|---------------|------|------------------------------------|--------|-----|
| 20～29歳 | 18.5 | 43.1 | 72.3 | 27.7 | 13.8 | — | 6.2 | 1.5 | 65 |
| 30～39歳 | 24.2 | 25.8 | 72.7 | 19.7 | 15.2 | 7.1 | 7.6 | 7.1 | 198 |
| 40～49歳 | 12.0 | 24.6 | 56.5 | 28.3 | 13.1 | 3.1 | 12.0 | 14.7 | 191 |
| 50～59歳 | 9.4 | 25.4 | 31.3 | 33.0 | 18.8 | 9.8 | 15.6 | 17.9 | 224 |
| 60～69歳 | 6.4 | 29.8 | 17.0 | 30.5 | 12.1 | 7.8 | 17.0 | 26.2 | 141 |
| 70歳以上 | 5.1 | 10.3 | 7.7 | 15.4 | 2.6 | 20.9 | 38.4 | 30.8 | 39 |
| 全 体 | 13.4 | 26.5 | 45.9 | 27.2 | 14.7 | 7.1 | 13.7 | 15.6 | 878 |
| | ┌───┐ 39.9 | | ┌───┐ 41.9 | | ┌───┐ 29.3 | | | | |

*（注）就労している妻は401人，全家族の45.7%
内訳は常勤10.8%，パートタイム11.7%，自営（家族労働）22.7%

観が近代家族の成立とほぼ並行して形成されたものであることは今や周知のことであるが、その視点から見るととき合計特殊出生率が5.11であった1925年と、3.65になった1950年、さらに1.5台にまで下った1990年とでは付与すべき情況文脈が全く異なる。現代の発展途上国をみるまでもなく、子供が稼ぎ手として文字どおり宝である状況と、10歳を頭に5人の子を育てた戦前戦中の日本の状況と、一人っ子貴族が云々される現在の状況とでは子育ての内容と意味は全く異なるのであって古い常識的態度でこれを読むことはできない。むしろこのデータには、母の世代によって構造化された賢母像を演技することに疲れてのストレス、受験戦争の強迫的幻影に脅えての不安等からくる関心の焦点化が読みとれはしないだろうか。子育てに疲れ果てての幼児殺し、親の過干渉や過剰期待に起因する登校拒否等の事件もこのことと無関係ではないと思われるのであ

る。

子の教育・子育てを除いて全体を概観すると、疑似ライフサイクル的に次の様な像が浮かんでくる。20代の新婚期は「夫との愛情関係が中心の生活」が関心の焦点であるが、30代になるとやや夫の昇進など「夫の成功」に関心が向く、しかしそれにも先が見えてくる40代になると「家の外での活動・親しい友人との交際」に関心が移り、50代ではそれが最も生活のほりあいを感じるようになる。なお、妻が就労している家族は全体の46%であるので「自分の職業生活」に生活のほりあいを感じる妻は表の数字の約2倍25~35%とみると、ライフサイクルのすべてを通じてかなりのほりあい関心の焦点となっていることがわかる。これらの関心の焦点を「夫との関係」、「子どもとの関係」、「家族外の領域」の3つにカテゴライズしてみると、それぞれ、40%、46%、42%となり、全体としては特に何れかに強く傾斜するという歪みはない。ライフサイクルのそれぞれの時期においてウエイトのかかり方が異なり、家族発達論的なそれぞれの時期の課題（生活欲求）を解決できる事が結婚幸福度につながるということになろう。先の結婚幸福度における評点の変化も、この「関心やほりあい」のライフサイクル的变化と照応させるとき我が国の妻の幸福感には「家の外での活動、友人関係」を家族生活と調和させつつどう構築して行くかが問題であり、（妻、結婚経過年数20年以後の満足度が両極化するという現象は）現在のところそれがあまりうまくはっていないのではないかという推測的仮説を示唆している。

⑦ 余暇の同伴性と結婚満足度

さきにのべたように、アメリカの妻にとって結婚生活の最大のメリットは「余暇・社交における同伴性」であった。種々な男女関係のあり方が容認されつつあるかに見える現在でも、やはりシングル・パーはそこはかたないわびしさの影をもったものとして語られ、大手をふったカップルへのまなざしはまぶしさ

【表7】 余暇の過ごし方

| | | 合 計 | いい楽 つつし もしみ よたに いい | でいが きつよ るしい だよ け | といと きつき にしに はよは 別々 | 夫楽望 婦しま 別むし 々のい にが |
|------------------|--------|--------------|--------------------------------|------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|
| | | 878 100.0 | 56 6.4 | 272 31.0 | 489 55.7 | 33 3.8 |
| 妻 の 年 齢 | 29歳以下 | 65 (%) | 7.7 | 50.8 | 40.0 | — |
| | 30～39歳 | 198 | 5.1 | 32.8 | 58.0 | 1.0 |
| | 40～49歳 | 191 | 4.2 | 27.2 | 62.8 | 4.7 |
| | 40～49歳 | 224 | 5.8 | 28.1 | 58.9 | 3.6 |
| | 60～69歳 | 101 | 7.8 | 28.4 | 51.8 | 6.4 |
| | 70歳以上 | 39 | 15.4 | 25.6 | 43.6 | 7.6 |

(N. A. 3.2%)

に彩られているようである。これにくらべて夫婦同伴で外へ出かけるのは冠婚葬祭の時ぐらいであった戦前はもとより、最近においても若い夫婦を除いて基本パターンは、今も昔とあまり変わらないというのが現在の日本ではなかろうか。しかもその若い夫婦ですら結婚後十年を出でずして、ゴルフ・ウィドウ化したり、フロ・メシ・ネルの関係になるというのがマス・コミの描く夫婦関係像なのである。

しかし、その実像はどうであろうか。「夫婦の余暇はどのように過ごすのがよいと思うか」(Q. 24) に対し、「いつも」あるいは「できるだけ一緒に楽しむのがよい」と答えた妻は20歳代の58.7%を除いて半数に満たず、「ときにはいっしょ」又は「夫婦別々の方がよい」という答えは、40～59歳では60%を越える(表7)。夫の回答もほぼ同じであるが全体として見た場合、「いつも」又は「できるだけ一緒に楽しみたい」が49.8%あり妻の37.4%を上回っている。夫の「余暇同伴性」への願望の方が妻より高いのはホンネなのか、現実への負い目なの

〔表 8〕 妻のみの余暇活動

| | | 合 計 | 非 常 に 多 い | わ り あ い あ る | ほ と ん ど な い | 全 く な い | 不 明 |
|----------------------------|---------|--------------|-----------------------|----------------------------|----------------------------|------------------|-----------|
| 全 体 | | 878 100.0 | 42 4.8 | 283 32.2 | 352 40.1 | 182 20.7 | 19 2.2 |
| 結 婚 経 過 年 数 | 3 年以下 | 54 | 1.9 | 14.8 | 53.7 | 27.8 | 1.9 |
| | 4 ～ 6 年 | 45 | 2.2 | 11.1 | 48.9 | 35.6 | 2.2 |
| | 7 ～ 9 年 | 37 | 5.4 | 21.6 | 54.1 | 18.9 | — |
| | 10～14年 | 107 | 7 5.5 | 47 43.9 | 39 36.4 | 11 10.3 | 3 2.8 |
| | 15～19年 | 94 | 7 7.4 | 43 45.7 | 27 28.7 | 16 17.0 | 1 1.1 |
| | 20～29年 | 22 | 15 6.8 | 77 34.7 | 87 39.2 | 40 18.0 | 3 1.4 |
| | 30年以上 | 293 | 8 2.7 | 86 29.4 | 118 40.3 | 72 24.6 | 9 3.1 |
| | 不 明 | 26 | 2 3.8 | 9 34.6 | 10 38.5 | 5 19.2 | 1 3.8 |

かは解釈の別れるところであるが、妻の方の余暇同伴願望の少ないのは先のブラッドの結果と対照的である。そしてそれを裏書きするかのよう、「妻のみの余暇活動」が、「非常に多い」又は「わりあいある」と答えたものが、全体として37%ある。その率は結婚当初こそ18%に過ぎないが、以後次第に妻単独の余暇活動が増し結婚経過年数15～19年の妻では、53%が、かなりの頻度で妻だけの暇活動を行っているのである（表8）。

夫との余暇・社交における同伴性に結婚することの最大の喜びを見いだすアメリカの妻に対し、日本では「会社のつきあい」の名のもとに夫のみのゴルフ

や宴席を、どこの家でもそうであるという日常的当たり前感から（それは井戸端会議的コミュニケーションの中で機会的構成物として定着させられて行き、強固な社会的構造物として、行為への規範性を増す）、夫との余暇同伴性を半ばあきらめる形で、強く求めないということになり、それが40代後半から50代の子離れ期に妻単独もしくは友人との余暇行動へと向かわせるのであろう。（夫55歳以上の老夫婦家族に対する1967年調査によれば、デパートなどへの買い物は独りで行くのが圧倒的に多く、一泊以上の旅行も、ひとりで、友人と、あるいは団体などで、行く回数の方が夫婦で旅行するより多い。そして、この買い物と旅行は妻の余暇行動の中で顕著に高い頻度を示すものなのである）しかも、かなりの頻度で単独もしくは友人とレジャーに出掛ける妻（全体の37%）の夫のほぼ9割が「何も言わない」（46%）か、むしろ「賛成してくれる」（44%）のである（Q. 31）。日本の国内グループ旅行においていまだに夫婦単位よりは、男女別相部屋が主流を占めることの裏書でもあろう。JRのナイスミディバスが妙にリアリティをもって感ぜられるデータである。余暇における同伴性は規範性の点でも、現実態においても、いまだ欧米とは異質なものであるといわざるを得ない。

このような文脈を付与して考えるとき、さきの妻の不満領域とそのスコア（表3）の解釈にも新たな意味が見いだせるであろう。なお、本稿の主題に照らして付言しておくならば、この質問は、主婦向けテレビドラマ「くれない族の反乱」（1984）で流行語となった「……してくれない」という妻の不満をそのままのワーディングで用いたものである。P. ブルデューが彼の面接調査において、被調査者が「よくぞ聞いてくれた」と思う様なことをひきだすことの重要性を強調していたのと同じ意味において、被調査者の日常生活での主婦間の会話において、「本当にその通りよ」などと言い交わすのと似た状況を疑似的に再現することを試みたものである。こうした視点による質問をさらに精緻化するならば、

ブルデューが、「一人一人の内的な葛藤にまで迫る聞き取りによって、被調査者に対する宗教的回心としての理解に至る」^⑭ことを目指したのと同様、被調査者の心の深層鉅脈を探り当てる様な質問を行うことが可能となろう。さて、このようにして行った質問において、「買い物や旅行などにいっしょにいてくれない」という不満は、7つの不満領域中、スコア値においてちょうど中位の第4番目に上げられている。もちろん、これとて、1960年代の調査（前述）では不満や対立として顕在化しなかったものである。しばしば指摘されるように余暇への欲求を肥大化させるようなレジャー業界の宣伝や、「生産の偶像から余暇の偶像へ」（L. ローウェンタール）という価値意識の変化がその背景にあり、通常、膨れ上がった余暇欲求が十分満たされないことの不満として説明される。

しかし、妻の夫に対する余暇同伴性への不満という点からすれば、先のデータにも見られるように、余暇同伴性をあまり望まず、現実にも単独あるいは友人との余暇行動をすることの方が多い妻達にとって、そうした不満は少ないであろうから、（多少は潜在的にあるにしても、その通りだという意識にはならない）、したがって、余暇・社交における夫婦の同伴を望む妻に限定すれば、不満スコアはもっと高いであろうことが予想される。この仮説的予想の実証には「余暇を共にしてくれない不満」×「余暇を共にしたい欲求」×「妻単独又は友人と いっしょの余暇頻度」のトリブルクロス等の統計解析的方法による分析もあるが、先にものべたような妥当性と信頼度の限界から本調査の規模では困難である。従ってここでは、上述の様な仮説的解釈にとどめざるを得ない。俗な表現で言えば夫は夫、私は私というように余暇行動を割り切っている妻には、同伴性への不満はない。夫と同伴の余暇活動を望み（近代的思考）、かつ自分ひとりでは外に出ることをためらう（伝統的思考）妻のアンビバレントな不満が余暇同伴性への不満となってあらわれているのである。紙数の都合で、すべての項目について述べることはできないが同じように、それぞれの文脈を付与するこ

とによってリアルな解釈ができるであろう。

以上のことを要約すると、夫婦だけの物見遊山など思いもよらなかった戦前はもとより、一世代（約30年）前の調査でも顕在化しなかった夫婦同伴での余暇の少ないことの不満が問題となるようになったことは確かであろう。しかしそれと同時に、一時流行語となったゴルフ・ウィドウと逆に、妻が単独もしくは友人と遊びに出ることも多くなり、夫もそのことを何とも思わないという状況がかなりの程度に生まれつつあることも事実のようである。つまり、余暇に関しては専制型家族主義（家父長制的家族）の夫婦関係における夫のみの余暇から融合型家族主義（近代的核家族）を経ずして、一気に契約型個人主義（別居家族に近い形）の夫婦関係における別々の余暇に進んでいるかに見えるのが現状といえそうである。

①夫婦の役割関係については、規範においても実態においても伝統的性別役割分担が余り大きな変化を見せず残っているし、②勢力関係においても、タテマエの平等とは別に、家事決定における意見のくい違いは、結局夫の意見に従うことが多いというのが現実であった。③そしてそれらを基層において支える家族イデオロギーにおいても、“イエ”的意識はタテマエとしては払拭されたかに見えるが、形を変えた「家の永続性」意識が最近の墓ブームに見られる（上野千鶴子）ようであるし、夫婦関係における「亭主閑白」を支持するホンネ的意識は余り衰えてはいない。④結局のところ、余暇の過ごし方における夫婦の関係が西欧的夫婦単位の余暇・社交という形を経ずして、かつての男のみの余暇から、夫婦別々の余暇（それも JR のナイスミディ・パスに象徴される中年主婦族の余暇）の増加へと変化しつつあるのが特徴といえそうである。それが西欧的な夫婦同伴型に回帰するのか、この余暇形態の変化が先がけの役割を果たして家族の個人主義化が進むのかは分からないが、「余暇は最も個人に属することの多い領域」（D. リースマン）とすれば、余暇をキーワードとして家族の個人化の

動向を読むことは有効な方法といえよう。

IV 契約型個人主義家族の萌芽とその分析視点 ——交差する二つの生活世界——

① 非伝統型家族の台頭

以上のように見てくるとき日本の（家族関係の核としての）夫婦関係はタテマエとしては夫の家事参加と家事決定における対等な話し合いを望みつつも（但しそれもそれ程強いものではない）現実には伝統的な性別役割と夫優位の勢力関係から大きくは脱け出ていないように思われる。それらの中で大きく変わったものに余暇活動があげられる。それは戦前においては夫婦同伴での余暇・社交という西欧的な習慣がなかったこと、および平均5人の子をかかえ朝から晩まで家事労働にあけくれる主婦と、外でのつきあい酒的余暇に象徴される夫との間にその機会もなかったことなどから、全く新しい夫婦関係の側面として立ちあらわれたものである。しかし、それは夫婦同伴の余暇・社交という方向へは向かわず、夫婦それぞれの余暇行動というものがかなり大きな部分を占めているようである。専業主婦にあっては戦前とは比較にならぬ家事労働の軽減による自由時間の増大（〈際限のない家事〉との指摘もあるがそれについては後に述べる）、ならびにカルチャーセンター等における交友関係（藤本信子：1983）が、ひとりで又は友人との余暇へと向かわせるし、パートを含めた有業主婦においては、男性に伍した形で職場を媒介とした余暇活動が増大する。妻たちの「生活のはりあい・関心」が「夫とのかかわり」、「子とのかかわり」と並んで「職業生活・友人との交際」という家族外での生活が全体としてほぼ3分される形であげられているのである。しかもそれは40歳代以上の妻では50%を越えるのである。（前述）

もしこれを「生活世界の意味的構成」というシュッツ的表現になぞらえるならば、「生活のはりあい、関心の焦点」という意味での「妻の意味世界」には家族外の人間関係とそこでの行動が大きな領域となっていることを物語るのである。上野千鶴子がF. I (family identity) をキーワードとして、夫、妻、子のそれぞれが「どの範囲の人々を家族とみなすか」を問うユニークな調査をしている（もっともこの問いも〈家族のどのような先験的定義も役立たない〉から、という彼女の意図に反して、用いられる家族という用語には日常知の意味（H. ガーフィンケル）が含まれている。したがって、その日常知的な家族の意味（イメージ）から外れるものを除外するということであり、自明的態度・常識の捉えなおしとしての意味をもつものである）。それによれば共働きで単身赴任の夫婦において夫にとってのF I は自分に妻・子を含んだものであるが、妻のF I からは夫が除かれ子と母だけになっているという事例があげられている。

「夫の単身赴任後も彼女と子供達の生活はほとんど変わっていない。むしろ夫の不在で以前より気楽な母子家庭となり、夫のたまの帰宅も歓迎されない。ここには家族より会社を選んだ夫、夫より子を選んだ妻の対比がある。夫は赴任先で社縁家族や酒縁家族など疑似家族づくりに励んでいるらしい」（傍点筆者）のである。もちろんこれは妻がキャリア・ウーマン、夫単身赴任という二つの条件の重なった事例で、専業主婦又はせいぜいパートタイマーという普通の人々（majority）にまで一般化することはできないが、多くの示唆を与えてくれる事例である。我々の「生活のはりあい・関心」についてのデータもさらに年齢区分を細分化すると「夫との愛情中心の生活」をあげる人々は35～39歳代でそれ以前より10%急減し、「夫の出世・成功」では40～44歳代でそれ以前より10%減少する。先の事例は一般の人々のこうした傾向を先鋭化した形で示すものといえる。事例の分析にこうした背景的データを併せ読み、逆に後者のデータの分析に先の事例を重ねる（superpose）ことによってより理解（解釈）は深まる

であろう。筆者の目指す方法とはこうした方法であり、マートンの経験的一般化をさらに肉づけするものと言えよう。

さて、先の事例にもどるとしよう。事例にあげられた妻は「以前よりも気楽な“母子家庭”の生活」を云々とししか書かれておらず妻の生活世界が欠落しているがそこには当然社縁の世界があり、彼女の生活世界から夫がはみ出した分、彼女の「生活のほりあい・関心」に自分の職業生活が入ってくるであろうし、さらには職場を媒介とする「親しい友人との交際」（その中には男性も含まれ得る）もあることは表6のデータからも十分推測できる。日常知的に言えば夫も多分そうであったように、キャリアウーマンであればあるほど、母である彼女も帰宅が遅れることもあり、夫が子をかまわないほどでないにしても、行き届かぬことがあるであろう。こうした形の家族が今後特殊な事例ではなく、かなりありふれたケースになるかどうかの予測は難しい。ましてやそれを契約型個人主義ないしは純粋個人主義的な家族という風にイデオロギー化して語ることは危険がある。「イデオロギーの機能は、その起源を隠蔽し存在を自明視させる」（上野千鶴子）と共に現実と遊離したそれが存在するかのごとき幻影を自明視させる機能をもつからである。もちろんこの類型は提示者の上子武次も言うごとくあくまでも理念型であるが、それを承知した上でもなお上記の類型を主要なパラダイムとして用いることには躊躇を覚える。したがって比較的現実に近い融合型家族主義（日本型友愛家族）から出発して、その言葉の指示するものの内容と本質は何であったのか、それからのいかなるヴァリエントが現在起こりつつあるのかを考えてみるのがよいであろう。

第一章でものべたように、アメリカでは、夫と専業主婦と未婚子という伝統的独立家族（執行嵐：1981）は全成人の世帯類型の中で16%に過ぎないのである。独居老人や単親家族はもとより契約婚的同棲、子供忌避婚、さらには性的に自由なシングルの生活をも含めて、非伝統的（家族）生活様式（alternative

| 男 | | 平均評点 | 女 | | 平均評点 |
|-----------------|--|------|---------------|--|------|
| 男 女 平 等 婚 | | 2.46 | 男 女 平 等 婚 | | 1.74 |
| 長 期 同 棲 | | 3.25 | 5 年 契 約 婚 | | 4.10 |
| 伝統的男女別役割婚 | | 3.38 | 長 期 同 棲 | | 4.19 |
| 5 年 契 約 婚 | | 4.01 | 伝統的男女別役割婚 | | 4.36 |
| 性的自由コンミュン | | 4.20 | 子 伝 忌 避 婚 | | 4.49 |
| 子 供 忌 避 婚 | | 4.22 | 独 身 主 義 | | 4.71 |
| 独 身 主 義 | | 4.51 | 男 女 逆 役 割 婚 | | 4.72 |
| 婚 外 性 関 係 容 認 婚 | | 4.91 | 性的自由コンミュン | | 4.92 |
| 夫 婦 交 換 婚 | | 5.05 | 婚 外 性 交 容 認 婚 | | 5.40 |
| 集 団 婚 | | 5.18 | 断統的一夫一婦婚 | | 5.50 |
| 断統的一夫一婦婚 | | 5.23 | 夫 婦 交 換 婚 | | 5.65 |
| 男 女 逆 役 割 婚 | | 5.36 | 集 団 婚 | | 5.67 |

life style)をとる成人は84%を占めており、それはもはや、かつてのように否定的ニュアンスをもって偏異家族と呼ぶことはできない。¹⁵⁾若い世代(大学生)における種々のタイプの婚姻(家族)形態の選好度(評価)では表9のごとく、契約婚や長期同棲が伝統的性別役割婚と同等もしくはそれを上まわる傾向すら見られ、このような non-traditional family forms は variant family (M. B. Sussman) として偏異的(deviant)という意味から解放されつつある。

我国では、実態としてまだその様な状況にはないが、ある意味で時代のトレンドを先どりする事もあるテレビドラマでは、「第三の家族」(1991. 6. 20読売TV)、「いっしょに住もうよ」(1991. 6. 23毎日TV)等が相次いで放映されている。前者は定位家族、生殖家族に続く第三の家族という意味でそれぞれ事情の異なる三人の初老の女性と一緒に老後を過ごそうというものであり、後者は老人と青年がふとしたことから一緒に住む(living together)ことになり、その中

で心の絆のようなものが生まれてくるというストーリーであった。何れも家族とは異なる共住、共食という形態と、その中から生まれる人間の絆のようなものを扱っている点で、今後の家族のありようの一端を示唆するものであった。アメリカでは既にH. フェルドマンが、血縁関係や婚姻関係のない者の共同生活さえ正常な家族として認めるべきである（家族政策から排除すべきでない）^⑬とのべているのである。

② 現象学的社会学の視点——夫婦関係への新しい視座——

人々が①“意味的に構成された生活世界”に生きる存在であるとすれば、②そしてその意味世界が生活史的に規定された関連性の体系の機会的なあらわれである関心の持ち方に従って意味付与されることの達成物として構成されるとすれば③さらにその関連性の体系が生活史的に規定されるとは、この世に生まれ落ちて以来の第一次集团的接触——C. H クーリーによればそれは自我形成の場でありアイデンティティや状況の定義づけ枠組の獲得の場である——における相互作用による所が大きいとすれば、婚姻という制度的枠の有無に拘わらず、一对の男女の結合関係は単なるつがい関係の安定的持続や子の養育の共同責任というだけでは包み込めない、二つの生活（意味）世界の交差という意味をも背負ったものである。通婚圏の狭い歴史的社会的状況においては夫と妻の意味世界にはあまり大きな差はなかったであろう。関連性の体系と類型化的認識を共有する夫と妻の間には大きな対立や不満はなく、もしあるとしても個人心理的次元のものであったと考えていいであろう。家の制度がかなり強い拘束力をもちかつ階層差が顕著になって来た時代の典型としての家父長制的家族において、夫の家に入る嫁は生活史的に規定された自らの意味（生活）世界を捨てて婿家の生活世界に同一化されることであり、黒いものをも白いと認識する関連性の体系を一日も早く共有できるようになることが必要であった。そして「集団とは類型化と関連性の体系を共有している人々の集合体である」という

シュッツ的定義からすれば、それを共有できない嫁は“家風に合わない嫁”であり、和合価値を至上とする伝統社会では、和合を妨げる異端者として、排除（離縁）も止むを得なかったのである。さらに我国では、近代といわれる明治以後になっても、なお長い間見合結婚（arranged marriage）が主流であった。人口移動が著しくなり、通婚圏が広域化するにつれ、異った生活世界（P. ブルデューの言う、文化資本や社会関係資本によって形成されたハビトゥスという方がより適切かもしれない）を形成して来た男女が共有し得るのは見合いというセレモニーの中での、挙作・話しぶりを通しての印象しかない。それを補うものとして、外的指標（学歴、職業、家柄 etc）を通しての生活世界の類似性の推測が両家の関係者によってアレンジされたのである。そして相互に相容れることのできないほどの生活世界（ハビトゥスの意味における）の相違がなければ「夫婦になれば情がわく」ものとしてめあわせられる。そして通常は文字どおり共住、共食、共食の生活を営む共在者（consociate）として、社会的構造感の再構成が進行し夫婦のそれぞれが形成してきた生活世界の重なりが多くなって行く。（この点ではむしろ社会的構造感（K. ライター）という方がびったりするかも知れない。ほぼ似たことがらをそれぞれの論者が、それぞれの言説の文脈の中で、より着床させやすい表現を用いていると解していいだろう。本稿においてもそのような用い方をするをおことわりしておく。）

年齢を経た老夫婦のツー・カーの関係には、殆どすべての領域において重なり合い共有された生活世界という像があるのではなかろうか。もちろんこの過程には、夫と妻の間だけの問題ではなく、社会的規範による拘束力もある。夫の家父長的勢力も、それが社会規範として妻に受容されている限り、妻にとっての抑圧感は低いし、夫への献身が妻の幸福感とすらなり得るであろう。夫唱婦随とは夫の側に引き寄せられた社会的構造感への再構成を意味したのである。日本的な融合型家族主義はそのようなものと解することができる。このような

視点からするとき夫婦（家族）生活の過程（family life cycle）とはそれぞれの段階において遭遇する課題への共同的な対処を通して、生活（意味）世界の共有度が増して行く過程であるといえよう。言葉をかえれば成員相互の個人誌の共有過程を通しての一体感と社会的構造感の共有的構成が進む過程といえよう。

前近代社会においては、それが強い制度的拘束力で夫方の家の世界への一体化を妻の側に求めたものであり、融合型近代家族では、主たる稼ぎ手である夫と、経済的に依存せざるを得ない専業主婦、そして青年期に至るまでの教育期間を親に依存せざるを得ない子、という構成の中で、夫（父）優位的秩序を自明のものとする社会的構造感の共有が進行する。融合型とはその秩序を前提としての感情融合（戸田貞三）である。それが『主婦の友』の描いた理想家族像であった。その理想像により近付いた夫婦は marital success を達成したことになり、恐らく結婚幸福度も高いということになったと考えられる。そして、それに対し疑問を抱く妻は識者によってたしなめられるというのが昭和40年頃の人生相談の一つのパターンであった（S. 44. 8. 6. 読売新聞¹⁷）。

現代家族において夫、妻、子（とくに青年期）のそれぞれが異なった生活時間、空間そして関心のもとに個人化が進んでいるといわれるのも、①重ね合わせることへの制度的拘束力が弱まったこと ②妻の就労の増加により夫への従属・依存度の減少と共に、妻自身が夫とは全く別の生活領域（職場の友人との余暇を含む）をもつようになったこと ③専業主婦の場合も、生活における必要領域（K. マルクス）としての家事の減少が、夫とは別な余暇領域を持つようになったこと ④さらに子供も基本的には親に依存しているものの自由な余暇領域を持つぐらいの経済的手段は持っている（フォアポケット、シックスポケットといわれる現象、学業よりはアルバイトに精を出す学生など）という状況にあること、等々から生活の重なり合う部分が少なく、極言すれば家庭という場は交差してはすれ違って行く点に近い存在になりつつあるのではないかとい

う感さえるのである。本稿において見て来たように伝統的な夫婦関係のパターンから最も変化があると考えられるのも余暇領域の行動においてであった。しかし人々それぞれが、それぞれに意味付与した生活世界をもっているということを前提とすれば、それが共有されたものとなるかならないか、またどの程度共有し合うのかはまさに機会的なものであり、夫婦は一体であるべきという様な規範的なものではない。夫婦の関係は共住、共食、共衾という生活の中で機会的に構成されて行くもので、その逆ではないのである。とすれば、生活の共有・分担部分を最初から明確にしておこうという契約型個人主義の夫婦関係も決してバリエーションなものではなく、生活世界の重なり程度の様々な連続体の一つの位相として存在するものである。このように考えてくる時、夫と妻の生活（意味）世界の隔たりはキャリアウーマンと呼ばれる人々においていっそう大きいであろう。彼女の生活領域において職業生活の占める位置は夫と同等もしくはそれ以上に大きく、別居結婚の形をとらざるを得ないこともまれではない。もちろんそれは先にあげた純粋個人主義とはその内容において異なるが形態はほとんど変わらない。夫婦関係が機会的構成物的性格をもつとすれば、その夫婦関係はかなり矛盾に満ちたものと言わざるを得ない。逆説的に言えば、その関係はむしろ規範的なものによって支えられたものなのである。法的な婚姻関係にあるという深層部分に支えられた“夫婦であるという思い込み”（K. ライター）であることの方がむしろ大きいのではなからうか。

夫婦別氏問題における論点も人格権としての姓名ということと共に、キャリアウーマンの場合、その氏のもとに永年の間築いて来た信用や社会関係資本（P. ブルデュー）が蒙る損失が大きなものとしてあげられているが、これもまさに彼女の生活世界において職業生活の領域が大きなウエイトを占めていることを示すものであり、逆説的に言えば、同氏を家族としての一体感の大きな支えだとする多くの人々に共有された常識的態度に敢えて背を向ける程職業が大

きな意味をもった世界であるということなのである。その様な妻と夫がどのようにして機会構成的に夫婦関係を構築していくかのプロセスは、もしそれが上述のような規範的な要素を含まないものであるとすれば、今後の夫婦関係の研究について大きな課題となろう。それが家族の解体に近い純粋個人主義型の夫婦関係になるのか、別個の生活世界を持つ一組の男女の間の葛藤や交渉（negotiation）を通してのいわば自省的夫婦関係とでも言うべきものになるのか。今後追求に値する課題である。

V おわりに——新しい課題のために——

以上、夫婦関係についての調査の結果を統計解析的分析と、データをエスノグラフィックな社会的文脈に着床させることによって意味付与するという解釈的方法、さらには夫婦関係を日常生活世界での機会的構成物と捉えるという現象学的社会学の視点からの考察を行って来た。そのうえに立ってなお付言すべきことを二三述べておきたい。

その一つは、「家族らしさ」を問い直す形で家庭内離婚は「離婚」なのだと説く坂本佳鶴恵の「楽屋裏の親密さ」に家族らしさの核心の一つがあるのではないかという発想である。^⑬ゴフマン的言い方をすれば、我々の家族外での行動は、舞台上で与えられた役割を演ずる役者の演技に似ており、我々は演技者として常にオーディエンスを意識した印象操作を強いられているのである。そして楽屋裏で見せる役者の素顔に似た意味で、家庭内の生活においては家族成員がお互いに印象操作をせず、感情をそのままに表出しあい生地のままに行動することが許され心やすまる気ままさをお互いに認めあった世界なのである。そこに家族らしさの本質があるのではないかというのである。そしてそれは恐らく生活世界の共有が進むほど強固なものとなる世界であろう。性が秘め事とされる所

では夫婦はその秘め事の共有者として親しさと気ままさの通じ合う仲となるのである。しかし、我妻洋が『性の実験』において描き出した状況では、性は必ずしもそれ程の重要性をもたなくなる。かといって、前章にあげたテレビドラマ「第三の家族」や「いっしょに住もうよ」が楽屋裏の親密さの共有に至るかははなはだ疑問である。恐らく「距てなき親しさ」（和辻哲郎）に至らぬ他人行儀が顔をのぞかせるであろう。しかし人が生活のどこかに楽屋裏の親密さと気ままの通ずる世界を求めるとすれば、家族が、そのオールタナティブスであるか否かは問わず、必要なものとして残りつづけるであろう。

第二は、梅棹忠夫が「妻無用論」によってセンセーションを起こした状況以上の変化が起こりつつあることである。いわゆるシャドーワークの論争とは別次元で、家族内領域に限定したとしても家事の手段的適応的な側面は、家庭電化製品や家事の外部化によってますます減って行くであろう。しかしそれに代わって家事における表出的自己充足的な側面は増しつつある。それはもはや家族成員のためという家族主義的（familism）なものから個人主義（individualism）への変化といってもよい。主婦が編み物や子供服を作るよりも既製服を選ぶセンスを持っていた方がずっとよいという梅棹の論理¹⁹以上に、インテリアのコーディネートやテーブルセッティングにおいて、家事の形をよそおいつつ実は自分の趣味的余暇行為を行い、ささやかな自己表出を行っているという要素が強くなりつつある。極端に言えば住居という装置全体を主婦自身の色に染め上げかねないのである。それに対し夫は、家の中のことは妻にまかせるという伝統的意識と、テーブルウェアやインテリアについて妻の持っている知識に對抗できず、「妻が主として行う」形で、意味内容の変化した家事が行われることになり、この傾向はますます強くなるであろう。

第三は、以上のような舞台裏の共有的な親密さが、次第に保ち難い状況（交差する生活世界）が生まれているにもかかわらず、また専業主婦の家事において

は妻の個人主義化が進みやすい状況（必要活動としての家事はしばしば手抜きされる）にもかかわらず、多くの普通の人々の夫婦（家族）関係は総じて安定しているということである。その機微は恐らくブルデューの言う「回心的理解」によってしかうかがい知ることにはできないかもしれない。しかしその入り口がどこであるかは、我々のデータからも見出せるであろう。その一つは、幾つかの設問についての夫の回答と妻の回答を比較することによって得られる。夫と妻がその個人誌の共有を深めて行く過程で、状況の定義づけや認識の枠組となるパースペクティブ（シュツ的に言えば関連性の体系）が共有されて行くなれば、両者の間の認識のズレ、相手の行為の理解のズレは少なくなるはずである。我々の調査で夫と妻の双方に「夫婦の理解やいたわりあいという点でうまくいっているか（Q. 77）」という評定法の質問をしたところ、両者の回答にほとんど差がなく、また、妻に「夫はあなたの悩みや相談事をよく聞いてくれるか（Q. 36）」と問い、夫には「妻の悩みや心配事をよく聞か」と問うた所、夫と妻に余り大きな差はないが、妻の方が夫の回答よりもやや「よく聞いてくれる」と認知する程度が高かった、（この程よいズレはむしろ夫婦の信頼関係にとってよい方向に作用するだろう）。その他、夫の収入に対する満足度（Q. 2）夫の社会的地位に対する満足度（Q. 3）くらし向きの評価（Q. 1）の何れをとっても夫と妻の回答にほとんど差はなく、何れもやや妻の満足度の方が高いのである。これもまた、妻の方が夫をより高く評価するという程よいズレとして夫婦関係の安定にとってプラスに作用しているのであろう。したがって逆に、上述の諸項目を含めて、夫婦間のズレの大きいケース（偏倚事例）が問題となるわけであり、それには家族ケースワーク的接近が必要となろう。（なお筆者はその疑似事例分析として新聞などの人生案内の相談事例を重視しているが、今回もまた紙数の関係から割愛せざるを得ない。ぜひ稿を改めて取り組みたいと考えている。）

【表10】 夫婦のきずなと情緒関係評価等

(%とスコア)

| 妻 | 合 計 | 情 緒 関 係 評 価 | | | | | 性 生 活 の 満 足 度 | | | | | 著 ら し む き | | | | | |
|-----|--------|--------------|--------------|-------------|-----------|------|---------------|--------|---------|------|-------|-----------|---------|---------|-------|---------|---------|
| | | たいへんうまくいっている | まあまあうまくいっている | あまりうまいっていない | うまくいっていない | スコア | 非常に満足 | だいたい満足 | どちらでもない | やや不満 | 非常に不満 | スコア(満足度) | 十分余裕がある | 多少余裕がある | やや苦しい | たいへん苦しい | スコア(評価) |
| 一般型 | 878 | 20.0 | 68.2 | 9.1 | 1.9 | 2.07 | 10.7 | 43.3 | 31.7 | 4.4 | 2.3 | 2.09 | 7.7 | 54.7 | 32.0 | 3.4 | 1.68 |
| 来世群 | 110 | 62.7 | 37.2 | — | — | 2.63 | 38.4 | 52.5 | 8.1 | 1.0 | — | 2.62 | 18.5 | 53.7 | 25.9 | 1.8 | 1.89 |

| 夫 | 合 計 | 情 緒 関 係 評 価 | | | | | 性 生 活 の 満 足 度 | | | | | 妻 の 性 格 の 満 足 度 | | | | | |
|-----|--------|--------------|--------------|--------------|-----------|------|---------------|--------|---------|------|-------|-----------------|-------|----------|------|--------|----------|
| | | たいへんうまくいっている | まあまあうまくいっている | あまりうまくいっていない | うまくいっていない | スコア | 非常に満足 | だいたい満足 | どちらでもない | やや不満 | 非常に不満 | スコア(満足度) | 満足である | とくに不満はない | やや不満 | おおいに不満 | スコア(満足度) |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 一般型 | 392 | 16.3 | 72.2 | 8.7 | 1.0 | 2.06 | 8.2 | 51.0 | 20.9 | 11.0 | 3.1 | 2.01 | 11.2 | 67.0 | 18.6 | 1.3 | 1.90 |
| 来世群 | 65 | 41.5 | 55.8 | 1.5 | — | 2.41 | 21.5 | 61.5 | 9.2 | 3.0 | — | 2.45 | 32.3 | 61.5 | 4.6 | — | 2.28 |

我々の調査データから得られるもう一つの示唆は、既に「夫婦関係の全体的満足度」と諸変数との関連（表2）の概観において原田氏ものべているように（注⑧参照）「夫婦間の理解やいたわりあいの満足度」と「性生活の満足度」という二つの根源的コミュニケーションが「夫婦間の満足度」と深い関連をもつということであった。

そしてこれは、「もう一度生まれ変わったとしたら今の夫（妻）と結婚するか（Q. 69）」という日常会話的設問に対する回答からも明白に読み取れる。この

回答の選択肢として「ぜひ今の妻（夫）と結婚したい」から、「どうとも言えない」、「もう結婚したくない」に至る6段階評価において、「ぜひ今の夫（妻）」というものを「来世「（まで）群」、それ以外を一般群として層間比較をしたところ（表10）、妻にとって経済的要因は余り関係なく、「性生活の満足度」と「情緒関係の満足度」の高い程明らかに来世も共にという者の比率が高かったのである。夫にとっても同様（夫の場合経済的要因にかえて妻の性格要因を取り上げた）であり、従来あまり明確な形で取り上げられることの少なかった性生活（離婚原因としてあげられる性格の相違は、実は性の相違なのだというような俗言がささやかれることはあっても）にあらためて目を向けることの必要性を示唆するものと言えよう。筆者も既に「人間関係としての性と家族」（1982、『社会問題研究』32巻1号）において論じているが、性革命といわれる程多様な性関係のあり方が追求される中で、夫婦関係の性がどのような位置を占めるのか、また夫婦関係の中で性がどういう意味をもつのか、恐らくパラダイム転換的な新しい視点を必要とする課題となるであろう。上記のデータはそれを予感させるものなのである。

注および引用文献

- ① この様なパーソンモデルの社会化領域での典型は、Parsons, T. & Bales, R. F. 1956, Family, socialization and interaction process. において展開されている。
- ② Leiter, K. 1980, A Primer on Ethnomethodology. 1987 高山真知子訳『エノスメソドロロジーとは何か』新曜社 16頁。
- ③ 前掲邦訳書 78頁。なおこの部分では、A. シクレルからの引用が多い。Cicourel, A. V. 1964 Method and Measurement in Sociology. 1981 下田直春監訳『社会学の方法と測定』など参照。
- ④ 前掲邦訳書 203頁、200頁。
- ⑤ 前掲邦訳書 30頁。
- ⑥ 本節では本稿のテーマと関連ある部分について『現代日本の夫婦関係』1992、の序

章（執筆は筆者）の一部を削除、加筆の上引用している。

- ⑦ これは W. R. Burr が最近の家族社会学研究のアプローチの変化としてあげた新しいアプローチに含まれるもので、それらは交換理論アプローチ、相互作用アプローチ、一般理論アプローチ、闘争理論アプローチ、現象学的社会学アプローチ、の5つにまとめられている Burr, W. R. 1973. Theory Construction and the Sociology of the Family.
- ⑧ 本研究の研究協力者であった原田隆司氏の作成によるもの（未発表）であり、本人の了承を得て本稿に収録した。なお「夫の結婚経過年数と満足度の相関」は原表ではなく、筆者の推計によるものである。なお原田氏はこの表の要約として次の様にのべている。

本節の分析で用いた33の変数との関連性から判断する限りにおいて、夫婦関係全体の満足度は、夫と妻の両方で、理解やいたわりあいに関してうまくいっているか否か、そして性生活の満足という2つの要因と最も深く関連しているといえることができる。この2つの、いわば夫婦間の根源的なコミュニケーションが、全体の満足という主観的でかつ総体的な判断の最も主要な根拠になっているのである。これとは対照的に、恋愛・見合いの区分や現在の家族構成、妻が就業しているか否かといった客観的な側面とは関連性をほとんどもたない。また、他の要因との相対的な比較の結果からすれば、配偶者の友人関係や親・兄弟・親戚などの夫婦以外の他者との関係も、全体の満足との関連性は余り高くない。以上が、夫と妻に共通して明らかになった点である。更に、夫と妻との主要な相違点は次の通りである。まず、夫固有の要因としては、妻の性格や行儀などのパーソナリティーへの満足と、性格に関して言い争いがあるかどうかとも関連性が高い。一方、妻の場合には、大事なことの決定や性格に関する言い争いの有無が全体の満足と深く関連しているといえることができる。

- ⑨ 労働省婦人少年局、1952、『農村婦人の生活実態』68頁、農村5地区472世帯中、妻と嫁又は娘を含む151世帯のデータ。
- ⑩ 上野千鶴子 1994『近代家族の成立と終焉』岩波書店 75～76頁。
 なお、家族社会学においては、家事について、賃労働、剰余価値などの経済学的パラダイムでのシャドーワークとは異なった意味付与がなされるべきであろう。
- ⑪ これに関連した最近の労作として 木村涼子「婦人雑誌の情報空間と女性大衆読者層の成立—近代日本における主婦役割の形成との関連で」がある、『思想』1992 2

月号。

- ⑫ 上野千鶴子 前掲書 83頁。
- ⑬ 藤本信子 1983「老夫婦家族の余暇活動」『社会老年学』No. 18、p. 74。
- ⑭ P. ブルデューがその新著 *Le Misérable Le Monde* における面接調査において強調していたことで、1993年11月の日本でのシンポジウムおよびNHK スペシャルのインタビュー、「P. ブルデューと語る」（1994年8月13、14日）でのべられている。
- ⑮ 執行嵐 1981「米国における非伝統型家族の台頭」『社会科学論集』第21集 3～4頁。
- ⑯ 執行嵐 前提論文 5～6頁。
- ⑰ 野村哲也 1992「制度論から人間関係論へ」『大谷学報』71巻3号、15頁。
- ⑱ 坂本佳鶴枝 1991「家族らしさ」、吉田民人編『社会学の理論でとく社会のしくみ』新曜社 24～29頁。
- ⑲ 梅棹忠夫 1959「妻無用論」『婦人公論』昭和34年6月号。